

運-10	コース名：造船経営管理セミナー	定員 8名
------	-----------------	----------

受入期間： 56. 9. 3～56. 11. 2

関係省庁： 運輸省 船舶局

受入機関： 海外造船協力センター

国別応募状況：

国名	応募数	受入数	国名	応募数	受入数
インドネシア	2	1			
タイ	2	1			
大韓民国	1	0			
パキスタン	0	0			
バングラデシュ	2	1			
ビルマ	1	1			
フィリピン	1	1			
マレーシア	0	0			
ブラジル	1	1			
アルジェリア	1	0			
エジプト	1	0			
インドネシア	3	0			

受入担当：北林春美

コーディネーター：佐藤千代

をもうけて欲しい。

③ Mr. Win (ビルマ)

- 我国の技術はかなり遅れており、すぐに応用できるような技術はあまりなかった。
- JICAやIHIから援助を得るよう、国にかえったら勧めたい。
- 研修旅行では、日本の造船所の労働生産性の高さ、修理による利益が大きいのには驚いた。
- 柿島氏の講義は大変勉強になった。
- セミナーに参加して大変よかったと思う。
- もっとレクリエーション施設・機会を作ってほしい。

④ Mr. Jovellanos (フィリピン)

- 講義は大変面白く、特に柿島氏の公認会計士としての視点は私には新しいものだった。
- ただ言葉の障害があったので、日本語コースを付設してくれたらいいと思う。
- 造船会社の Research & Developing Centre を見学したのは良かった。我国もこのような研究・開発に力を入れるべきだと思う。
- Safety Control に関する講義を加えて欲しい。

⑤ Mr. Broto (インドネシア)

- 我国では新造よりも修理の方が多いが、施設が良くない。将来はこの効率を高めるようにしたい。
- 講義の中にスライドやフィルムをもっと使って説明してくれたらいい。
- セミナーは6週間で十分だと思う。一部の講義をカットすればよい。

⑥ Mr. Deche (タイ)

中小の造船所についての講義が最も良かった。何らかの形で自分の国にも応用したい。研修旅行は良かった、特にIHIの研究開発センターでは、色々の分野について知り得た。ただ造船所について、もっと細かいところまで知ることができればもっとよかったと思う。

• cost control, benefit control についても触れて欲しい。

• もっと Quality Control や Research Works の実習を加えて、期間を長くして欲しい。

• 参加国をもっと多くしたらいい。(他の先進国の参加もあればいい)

• 一つの講義の時間を短くして多くの題目をとりあげたらいい。

• 来年から2名参加できるようにしてほしい。

• 造船業の経営管理に関する講義はマネージャーとして経験を積んだ参加者にとって貴重なものだった。

• 生産管理の講義は良かったが、大造船所を例にとっているため我々には、あてはまらないところがあった。

• 参加国の造船業は中小レベルであり、その意味で講師も、そのような造船所の経営管理の経験のある人が望ましいと思う。

⑦ Mr. Gasperz (インドネシアG-G)

見学では、生産の現場を見ることができ色々を知ることができ大変良かった。自国政府・造船工業会・自分の会社へレポートを提出するが、効率・生産性を高め、経費を減らすための activity を応用したい。

⑧ Mr. Sardjono (インドネシアG-G)

- 民間企業に働いているので、Generalな講義でなく Case by Case の新しい technical なものを期待してきた。柿島氏の講義はその意味で非常に Refreshing だった。
- 新機械・技術などを導入したときの日本の技術革新経験について知りたかったが、思ったほどわからなかった。
- 参加者が異なる背景・分野の人だったことが、討論を生き生きさせてよかった。
- 滞在は快適だった。

⑨ Mr. Stedja (インドネシアG-G)

- ほとんどの講義が興味深く、自分の会社に応用したいと思うものが多かった。
- 日本の労働者の労働意欲の高さに驚いた。どうしたらやる気をおこさせるかということが大切だと知らされた。
- 東北造船では、自分の造船所と同じ大きさのところですべて大型の船を作っているのに驚いた。できるかぎり学んだことを応用して、自分の造船所を変えていきたい。

- 東北地方の中小造船所見学、中小造船所の経営管理、品質管理の講義が最も良かった。

見学先では時間が短かくて思うように質疑を行えなかった。

- 見学は講義のあとにした方が better.
- 図書館にもっと英語の文献をそろえて欲しい。
- 見学先とのディスカッションの時、経験ある司会者がいれば良かったと思う。
- 参加者の地位から考えて、セミナーの期間については再考を要する。

- General Orientation は人が多すぎた。

担 当 所 感

- 本セミナーは、船舶技術コースの姉妹コースとして、造船所のマネージャークラスを対象に、インドネシアG-G 3名を含む9名（エジプト、アルジェリアの2名辞退）の参加により、9月3日～11月2日までOSCCにて実施された。
- 中小造船所の経営管理を中心とする講義・見学のプログラムは、各割当国のNeedsに合致していたものと思われ、参加者の地位・経験・能力、等は、ほぼ満足できる状況で活発な討論・質疑等が可能であった。インドネシアのG-G参加については、事務手続上、手間どったがその意欲が他の研修員に対して、良い方に影響したと思う。
- プログラムは、OSCCに於ける座学とカントリーレポートの発表、東北地方及び瀬戸内の造船所見学で、講義・見学とも中小造船所に関するものが研修員の現実的関心をひいたようである。（但し、ブラジルでは造船業のレベルが高いため、他の国とは異なる興味を持っているようであった。）
- 講師・見学先・テキストのアレンジはOSCCにて成されたが、公認会計士柿島氏の中小造船所の経営管理に関する講義、三菱重工若崎氏の修理部門の業務管理に関する講義は殆ど全部の研修員から高い評価を受けた。見学先では東北地方の3造船所が熱心に対応してくれ、重役・部長クラスの人が複数で見学・討論に出席、100%近く英語で対応してくれた。テキストについては、研修員からは、OSCCから与えられたものでほぼ十分であるとの意見が多数を占めた。
- 今年度のコースについては、内容的にも運営上も、当初の目的を達成したと考えられる。ただ、今回の場合、研修員のレベル、参加国のレベルが揃っていたことがその一因と思われるので、また今年度、運輸省造船課より割当国の是非（韓国、ブラジル）について、要請のあった段階で難色を示してきた経緯もあるので、来年度の割当には注意を要する。
- OSCCの運営・アレンジには問題はない。

第2回造船経営管理コース日程表(案)

56. 5. 14改正
56. 4. 10

月 日	曜	時 間	研 修 題 目	講 師 名	役 職 名	備 考
9. 7	日		オリエンテーション			JICA
14	月	10:00~13:00	開講行事, コース説明			OSCC
		13:30~16:30	日本の造船工業の現状	船舶局 日本造船工業会		"
15	火		祝 日			
16	水	10:00~12:00	日本の中小規模造船業 (発展の経緯と現状)	浅野 芳 郎	(社)日本中型造船 工業会専務理事	OSCC
		10:30~16:30	日本の造船関連工業, 国内需給と輸出状況	大 和 佳 助	(社)日本船用機械 輸出振興会専務理事	"
17	木					
18	金		} 研修旅行 (塩釜, 石巻地区)			
19	土					
20	日			休 日		
21	月	10:00~16:30	造船業の経営管理概論	長 塚 誠 治	IHI 海外事業 本部調査部長	OSCC
22	火	10:00~16:30	日本における造船業, 経営管理の特質	柿 島 勝	公 認 会 計 士	"
23	水		祝 日			
24	木	10:00~16:30	造船業の経営と営業管 理(受注管理)	柿 島 勝	公 認 会 計 士	OSCC
25	金	10:00~16:30	財務管理概論	同 上	同 上	"
26	土	10:00~14:30	予 備 日			
27	日		休 日			
28	月	10:00~16:30	造船業における資金管 理・利益管理・設備資 金・運転資金の調達運 用等	柿 島 勝	公 認 会 計 士	OSCC
29	火	10:00~16:30	予算の編成・運用・管 理について	同 上	同 上	"
30	水	10:00~16:30	原価管理について	同 上	同 上	"
10. 1	木	10:00~16:30	造船業における経営分 析の方法, 企業内容の 見方	同 上	同 上	"
2	金	10:00~16:30	Country Report の 発表・討論	柿島勝, 伊藤善一		"
3	土		予 備 日			
4	日		休 日			
5	月	10:00~16:30	Country Report の 発表・討論	柿島勝, 伊藤善一		OSCC
6	火	10:00~12:00	設計の重要性とその役割	伊 藤 善 一	IHI, 海外事業本部 研修グループ部長	"
		13:30~16:30	設計に関する問題点の 摘出	同 上	同 上	"
7	水	10:00~16:30	設計の日程管理と品質 管理の手法	同 上	同 上	"

月 日	曜	時 間	研 修 題 目	講 師 名	役 職 名	備 考
10. 8	木	10:00~16:30	標準化	伊 藤 浩	IHI, 海外事業本部 研修グループ部長	OSCC
9	金	10:00~16:30	資 料 管 理	同 上	同 上	"
10	土		祝 日			
11	日		休 日			
12	月	10:00~16:30	生産部門の役割、一般的 Production Flow	安 藤 一 三	IHI, 海外事業本部 プロジェクト室部長	OSCC
13	火	10:00~16:30	安全および品質管理	同 上	同 上	"
14	水	10:00~16:30	生産管理、特に日程管 理について	同 上	同 上	"
15	木	10:00~12:00	日程計画演習	同 上	同 上	"
		13:30~16:30	技術移転の実例	木村 弘	IHI, 海外事業本部 プロジェクト室副室長	"
16	金	10:00~16:30	日本におけるTQC (CWQC)の紹介	宮 内 一 郎	日科技連参与 経営コンサルタント	"
17	土		予 備 日			
18	日		休 日			
19	月					
20	火					
21	水		瀬戸内海地区造 船および関連工 業実地研修			
22	木					
23	金					
24	土		予 備 日			
25	日		休 日			
26	月	10:00~16:30	船舶修理部門における 工程および業務管理	若 崎 浩	三菱重工 横浜修繕部主務	OSCC
27	火	10:00~16:30	同 上 (現場における指導)	同 上		"
28	水	10:00~12:00	船級協会(日本海事協 会の業務および海外活 動)について		日本海事協会	"
		13:30~16:30	国際協力について		海外経済協力基金	"
29	木	10:00~12:00	パネルディスカッション			"
		13:30~16:30	総合討論会および エバリエーション			"
30	金	10:00~16:30	閉 講 式			"
31	土					
11. 1	日					
2	月					
3	火		帰 国			

研修旅行実施日程 (案)

56. 5. 14
56. 4. 10

月 日	曜	発 地	着 地	研 修 (見 学) 先	備 考
9. 17	木	横 浜	塩 釜	東 北 造 船 (株)	塩 釜 宿 泊
18	金	塩 釜	石 巻	山 西 造 船 (株)	石 巻 又 は 塩 釜 泊
			〃	村 山 造 船 所	
19	土	石 巻	横 浜		
10. 19	月	横 浜	因 島		因 島 宿 泊
20	火			日 立 造 船	
				三 和 ド ッ ク , 鉄 鋼 団 地	因 島 宿 泊
21	水	因 島		内 海 造 船	
			姫 路		姫 路
22	木	姫 路	姫 路	西 芝 電 機	
				浜 中 製 鎖	姫 路 宿 泊
23	金	姫 路		兵 神 ポ ン プ	
				石 原 造 船	
			横 浜	阪 神 デ ィ ー ゼ ル	



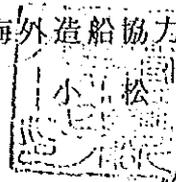
海造協(横)第 164 号
昭和 56 年 12 月 1 日

国際協力事業団

理事 瀬川 治久 殿

財団法人 海外造船協力センター

専務理事 小松 義和



研修実施報告書の提出について

拝啓 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。かねてより、ご高配に接し、厚くお礼申し上げます。

さて、昭和56年9月1日付けをもって契約いたしました昭和56年度造船経営管理セミナー Mr. Mostafa Haider Choudhury 他 8 名に対する研修実施契約は完了いたしましたので契約条項第 9 条に基づいて下記のとおり報告いたします。

敬 具

記

1. 研修実施概要

別 紙 1. のとおり

2. 研修経費精算報告書

別 紙 2. のとおり (略)

別紙 1.

1. 研修実施概要

(1) 研修員名 (国籍)

Mr. Mostafa Haidor Choudhury (Bangladesh)
Mr. Gerson Machado (Brasil)
Mr. Naing Win (Burma)
Mr. Broto Sasongko (Indonesia)
Mr. Cesar V. Jovellanos (Philippines)
Mr. Dech Budoharontong (Thailand)
Mr. Gaspersz Rudolf Wijnnand (Indonesia)
Mr. Sardjono Suman Prajogo (Indonesia)
Mr. Dido Sutedja Wiramihardja (Indonesia)

計 9 名

(2) 研修科目

昭和56年度造船経営管理セミナー

(3) 研修実施期間

昭和56年9月3日～昭和56年11月2日

(4) 研修実施機関

財団法人 海外造船協力センター

(5) 主たる研修場所

横浜市港南区日野町467番1

財団法人 海外造船協力センター

(6) 実施した研修内容

付属書1「日程表」のとおり

(7) 見学した機関等

- 東北造船(株) (在塩釜市)
- 村上造船(株) (在石巻市)
- (株)山西造船鉄工所 (在石巻市)

- 日立造船(株)広島工場因島 (在因島市)
- (株)三和ドック (在因島市)
- 因島鉄工団地協同組合 (在因島市)
- 内海造船(株)瀬戸田工場 (在広島県瀬戸田町)
- 西芝電機(株) (在姫路市)
- 濱中製鎖工業(株) (在姫路市)
- (株)石原造船所高砂工場 (在高砂市)
- 阪神内燃機(株)明石工場 (在明石市)
- 三菱重工業(株)横浜造船所修繕部 (在横浜市)
- IHI 横浜第二工場 (在横浜市)

計 13 カ所

(8) 交付したテキストブック・資料等

- The Present Situation of the Shipbuilding Industry and Administration on the Industry in Japan.
- Introduction of Management Control in Shipbuilding Industry.
- Technical Management for Design and Production.
- - do - Supplement.
- Medium and Small Shipbuilders in Japan.
- Business Analysis (Ways to find out problems).
- Management of Medium and Small Scale Shipyards.
- Management of Funds.
- The points to be Checked in Cost Accounting.
- Tables.
- An Example of Joint Venture.
- Country Reports.
- Japan Shipbuilding Quality Standard (Hull part).
- Shipyard Management and Production Control.
- - do - Supplement.
- Shipbuilding and Marine Engineering in Japan 1980.

計 16 部

(9) 日本語講義

課外時間（18：00～20：00）に合計18時間の講義を行った。

2. 研修結果の評価等

(1) セミナーの評価（アンケートの結果）

JICAへ提出されたフィナルレポート、および当センターにて独自に求めたアンケートによる研修員の評価は次のとおりである。

①	セミナーの期間	： 長過ぎる	2人 / 9人中
		適 当	6人
		短か過ぎる	1人
②	総合評価	： 大変よかった	0人
		よかった	8人
		よかったが改善 してもらい点あり	1人
③	カンントリーレポートの 発表	： 大変よかった	0人
		よかった	9人
		興味なし	0人
④	研修旅行	： 大変よかった	2人 / 9人中
		よかった	7人
		不満足	0人

(2) Evaluation Meeting の記録

① 本セミナーで、ためになった、或は得るところが多かった事柄。

イ Mr. Choudhury (Bangladesh)

- 中小造船所における Q.C. Production and Financial Management.

- One side welding を実際に見られてよかった。
 - 最小人員、最小の Labor cost で最大の生産を挙げているのに驚嘆した。
- Mr. Machado (Brasil)
- 造船所の現状と将来の展望が見られた。
 - Drawing と Labor の問題は興味深かった。
- ハ Mr. Win (Burma)
- 少い Worker で多くの仕事をやっている日本の Management.
- ニ Mr. Jovellanos (Philippines)
- 柿島講師の Lecture はおもしろかった。
 - Research Institute (IHI) は、途上国では見られないので、興味をもって見学した。
- ホ Mr. Broto (Indonesia)
- Repair の Lecture は大変よかった。
 - Chain Manufacture の見学は大変ためになった。
 - 三菱造船の船の拡大改造するフィルムを見て、以前からの疑点が解決した。
- ヘ Mr. Dech (Thailand)
- 中小造船所を訪れて、Layout, Organization, Worker' Etc. について、よく知ることができた。
- ト Mr. Gaspersz (Indonesia)
- Lecture も Observation も、How to plan, Do, See を学ぶのに大変役に立った。
 - Production Cost についての Lecture もよかった。
- チ Mr. Sardjono (Indonesia)
- 柿島講師の Lecture は、私を Refresh させてくれ、多くの知識を得た。

② 本コースで得た Know - How や知識を帰国後どのように使ったり、応用するか。

イ Mr. Choudhury (Bangladesh)

- 独立後日が浅い Bangladesh に日本の技術、Know-How をとり入れるには時間がかかる。

ロ Mr. Machado (Brasil)

- 私の大学 (Sao Paulo Univ.) の授業に全面的に応用したい。

ハ Mr. Dech (Thailand, King Mongkut's Institute)

- 国の造船所と連絡をとり、本コースで得た知識を伝えたい。

ニ Mr. Sardjono (Indonesia)

- 柿島講師より教えてもらった Layout を参考にしたい。

③ 講師、OSCC、JICA に対するコメント、要望等

イ Mr. Choudhury (Bangladesh)

- Ship Machinery Outfitting の Lecture を加えて欲しい。

ロ Mr. Machado (Brasil)

- 造船所の見学の時間が短かった。もう少し Flexible にできないか。1つの造船所に2~3日いられないだろうか。
- 溶接機械、クレーンの会社を見学するとよい。
- Layout についての Lecture は、もっと Systematic に。

ハ Mr. Win (Burma)

- Schedule がつまり過ぎている。1週間位の Free Study の時間があればよい。

ニ Mr. Jovellanos (Philippines)

- 日本語の集中講義をセミナー前にやるとよい。

- Safety についての Lecture を希望。
- Management of Research and Development Institute の Lecture を希望。

ホ Mr. Broto (Indonesia)

- フィルム、スライドをもっと使ったらよい。
- 関連工業の見学をふやしてほしい。
- オイルリッグ、プラットフォームを作っている会社を見学したい。
- Lecture hours が長すぎる。

ヘ Mr. Dech (Thailand)

- Layout についての Lecture をもっとやってほしい。

ト Mr. Sutedja (Indonesia)

- 1 造船所で 1～2 時間の見学では短かすぎる。
- Text はもう少し軽くできないか。

チ Mr. Jovellanos (Philippines) 追加

- 1 カ月に 1 日位 Free day をとられるよう、或はセミナー終了後数日 Free にできないか。
- 部屋—教室—食堂の往復だけで、あまり外を知らないで、リクレーションを企画してもらいたい。
- 母国（フィリピン）には JICA の既研修生が沢山いる。JICA が組織化を考慮されたい。

④ 第 1 回（55 年度）の改善意見に対し、今回改善して実施した事項

イ オリエンテーション（造船および関連工業の紹介）は 8 時間に短縮し、説明の重複を省いた。

ロ 講義に要する資料は全講義に巨り配布した。テキストは一部修正して新しいデータをとり入れた。

ハ 修理の管理業務に関する講義は 2 日間に延長し、うち

1日は造船所の現場において、その実務の講義を行った。

ニ カントリーレポートはセミナー開始前に各講師に配布し、講義の参考に資し、研修員には、発表以前に配布し、勉強、分析させた。

ホ 各国の当面する問題点に対しては、講師より十分な意見、指導を行った。

ヘ 研修旅行は2回に分けて（前回は1回）1日の見学箇所を少くし、1カ所にできるだけ時間をかけた。

3. 研修成果

本コース参加の研修員は、その殆どが管理職者（1部は大学の助教授）であったためか、流石にオール・ジェントルマンで受講態度よく、しかも熱心であったので、短期間ではあったが、前述の評価に示す如く全員が「参加してよかった」と評しているところから研修成果は大いに挙げたものと確信する。

4. 今後の方向

本コースは回を重ねること2回であるが、1回より2回目とその充実を計ってきたが、来年度はテキストに最新のデータを取り入れて改訂、講義にはフィルム、スライド等の視聴覚をもっと取り入れることとし、見学先も関連工業等を更に多く加えてバラエティに富んだものとして一段の充実を計ることとする。

なお、今回のG・Gベースの参加者は揃って他の研修員に比し熱心と見受けられたが、これは自国の負担で参加しているので、少しでも多く吸収しなければ損だという意図に因るものと判断される。今後ともG・Gベースの受入れは大いに歓迎する。

5. 添付物

- | | | |
|------------------|---|---|
| (1) 研修計画書（付属書1） | } | 略 |
| (2) 研修員名簿 | | |
| (3) 閉講式掲載の新聞切りぬき | | |

(了)

運-11	コース名：海運経営実務	定員 12名
------	-------------	-----------

受入期間： 56. 9. 3～56. 11. 2

関係省庁： 運輸省 海運局

受入機関： 日本船主協会

国別応募状況：

国名	応募数	受入数	国名	応募数	受入数
バングラデシュ	2	1	ボリヴィア	1	1
インドネシア	3	1	ペルー	1	1
大韓民国	1	1			
マレーシア	2	1			
パキスタン	2	1			
フィリピン	3	1			
シンガポール	2	1			
スリランカ	1	1			
ソロモン	2	1			
アルジェリア	1	1			
エジプト	2	1			
イラン	0	0			
アラブ首長国連邦	1	1			
ニューギニア	1	1			
セネガル	0	0			

受入担当： 佐々木 幸男

コーディネーター： 市川 康行

昭和56年度海運経営実務コース

研修期間：昭和56年9月3日～同年11月2日

研修員数： 15名（定員 12名）

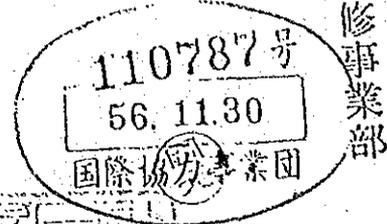
主たる研修受入機関：運輸省海運局，日本船主協会

研修実施機関としては、比較的オール・ラウンドに対応できる日本船主協会であった為、今回の集団の様な中堅技術者であって、行政官、港湾監督者、船主側、及び航海技術者という多岐にわたる業務分野をカバーする工夫も為されたので、初期の目的を相当達成できたものと思料する。

船主国第 3 1 号

昭和 5 6 年 1 1 月 2 8 日

国際協力事業団 御 中



日本船主協会

国際部

昭和 5 6 年度集団研修海運経営実務コース
の報告について

題記研修実施契約書に従い、研修実施概要、研修成果、実施上の問題点および改善方向等に関する報告並びに研修経費精算報告書を添付の通り提出致します。

以 上

昭和56年度集団研修海運経営実務コース
業務実施報告書

(1) 研修の概要

研修日程，講義題目，講師，見学先施設の選定につきましては，貴事業団並びに運輸省とお打合せの上，決定致しました先のスケジュール表をご参照願います。

本年度のスケジュール作成及び研修の実施にあたっては，特に下記の諸点に留意致しました。

- (a) 講義スケジュールについては，海運産業の特性及び産業発展の過程を考慮したプログラムを組む。すなわち，世界海運情勢から始め，不定期船，タンカー，定期船の運営，海運行政，海上交通安全等の行政及び保安関係，日本内航海運を経て海運関連産業の荷主活動，造船業の現状の順序でプログラムを組み，最後の日本海運の現状をもつて本スケジュールのしめくくりとした。
- (b) 講義スケジュールの中で，前年度には組み込まれた船積書類講座について本年度は取りやめとし，これに代わるものとして海上交通安全講座を組み入れた。
- (c) 講義時間については，午前2時間，午後2時間とし，講義時間中に研修生との質疑応答，意見交換の機会を設けるよう講師に依頼した。
- (d) 講義のよりよい理解のため，講義テキストを事前に作成し研修生に配布した。
- (e) 講義期間中，週一回程度，研修生の講義内容の理解を深めるため，主要講義の直後に，一日もしくは半日の実地見学を行うこととした。

(f) 当コースの特色となつている海運会社での個別研修については、研修生の評価が高く、JICA及び運輸省担当官より一日増加の要請があつたのでこの要請を容れた。

(g) 研修旅行については、本年度は広島県の石川島播磨重工業の呉造船所見学及びKICT(Kobe International Container Terminal)の見学を組み入れることが事前打合せに提案されたので、これらを日程に組み入れた。

(2) 研修成果

本研修において、参加希望者が前年比倍増以上となつたため、一国一名にて、15名迄と人数制限を行わざるを得ませんでした。参加研修生の母国の海運産業の発展段階にも大きな差がみられ、このため講義項目に対する興味についても差異がみられました。しかしながら、当コースがGeneral Courseとして持つ性格からすれば概ね成功であつたと研修生からの評価を得、研修生のFinal Reportからも、当コースで学んだことが将来母国で役立つであろうことが表明されています。

南米からアフリカまでをカバーするほぼ全ての地域から集まつた当コース研修生15名がよくまとまつて皆元気に無事に母国へ帰国できたことは、ひとえに各講師の熱意ある講義の賜物であると思われれます。幾多の講師におかれては、所定の講義時間を超過し、研修生からもさらに時間が欲しいとの要望が出る程でありました。

また本年度研修生にあつても、講義における応答がよいとの指摘が幾多の講師から表明されました。この点においても研修生と各講師とのコミュニケーションが良好であつたと思われれます。

先進海運国日本の海運知識の吸収もさることながら、人と人との相互の理解と協力を深めることによつて発展途上国海

運の発展及び途上国と日本とのより良きコミュニケーションの達成という本研修の目的は相当程度達成されたものと思われれます。

(3) 実施上の問題点と今後の改善点

(a) 講義テキストについて、同一講座については基本的に前年度テキストを踏襲することが事前に確認されましたが、特に講師の変更が例年より多く、このため新規翻訳、印刷頁数が増加したことにより、原稿翻訳謝金の予算を大幅に超過することとなりました。この点、来年度は上記の再確認と変更部分についての早期確定がおこなわれる必要がありと思われれます。

(b) 研修生の受講対象年齢がGeneral Informationでは35才以下と規定されています。ある程度のオーバーはやむをえないとしても、50才前後の研修生については選考対象から除くことが望ましいと考えられます。

(c) 本年度研修生の講義項目に対する改善・要望点を纏めると、「保険証券」「船積書類」講座を加え、「国際複合運送法制」については半日から1日に延長されることが望ましく思われれます。

内航海運関係の講義は割受してよいと考えられます。

昭和56年度海運経営実務研修講座スケジュール

56.7.30

主催：国際協力事業団（JICA）
 協力：運輸省・日本船主協会
 期 間：昭和56年9月3日（木）～11月2日（月）
 講義会場：New City Hotel（新宿西口）会議室
 講義時間：（午前）10:00～12:00
 （午後）14:00～16:00

週	月	日	曜日	形式	時	研 修 内 容	講 師
第1週	9	3	木			オリエンテーション（JICA）	JICA
		11	金				
第2週		14	月		A.M. P.M.	運輸省表敬訪問 船主協会表敬訪問	運輸省・船主協会
		16	水	発 表 討 論	A.M. P.M.	カントリートレポート発表	運輸省・船主協会
		17	木	講 義	A.M. P.M.	国際海運情勢 国際海運の動向	海運局外航課補佐官 久野 彦四郎 日本郵船調査室長 豊島 康輔
		18	金	講 義	A.M. P.M.	不定期船の運営 タンカーの運営	山下新日本汽船通洋第一企画課長 川本 邦雄 ジャパンライン調査部長 島 隆一
		21	月	見 学	A.M. P.M.	鉄鉱石専用バス+自動車工場	運輸省・船主協会
第3週		22	火	講 義	A.M. P.M.	定期船の運営と海運同盟	日本郵船 営業第一副部長 高 橋 宏
		24	木	講 義	A.M. P.M.	コンテナリゼーション	日本海上コンテナ協会 事務局長 勢 川 武 彦
		25	金	講 義	A.M. P.M.	コンテナターミナルの管理運営 国際複合運送法制一現状と将来	川崎汽船 港務事業室長 片 岡 勝 商船三井 法務保険部長 桜 井 玲 二
第4週		28	月	見 学	A.M. P.M.	大井コンテナターミナル+船の科学館	運輸省・船主協会
		29	火	見 学	A.M. P.M.	コンテナ製造工場	運輸省・船主協会
		30	水	講 義	A.M. P.M.	日本の港開港一現状と将来 用船契約及び海事仲裁	港務局計画課専門官 前田 正 彦 ジャパンライン 法務室審議役 徳 永 欣 吾

週	月	日	曜日	形式	研修内容		講師
					時間	内容	
第4週	10	1	木	講義	A.M.	海運行政組織及び法令	海運局総務課補佐官
					P.M.	給員行政	三士
					A.M.	海運助成の現状	三宮
第5週	11	2	金	講義	P.M.	海上交通安全	海上保安庁警備救難部航行安全課航行指導室補佐官 坂田
					A.M.	日本荷主協会の活動	安藤
					P.M.	日本の内航海運の現状	野崎
第5週	11	5	月	講義	P.M.	日本のカーフェリーの現状	野崎
					A.M.	東京湾海上交通センター	岩崎
					P.M.	日本の造船業の現状	村井
第6週	12	8	木	講義	P.M.	給船の技術革新	飯田
					A.M.	日本海運の現状	野村
					P.M.	横浜港+自動車積みパース(本牧)	飯野
第6週	12	9	金	講義	P.M.	各船社で個別研修	6船社
					A.M.	呉及び関西方面研修旅行	運輸省・船主協会
					P.M.	予備日	
第7週	13	20	火	研修旅行	A.M.	REPORT作成	運輸省・船主協会
					P.M.	研修生/関係者意見交換	運輸省・船主協会
					P.M.	閉講式	JICA
第8週	14	27	火	自習	A.M.	予備日	
					P.M.	予備日	
					P.M.	予備日	
第9週	15	28	水	討論	A.M.	予備日	
					P.M.	予備日	
					P.M.	予備日	
第9週	15	29	木	閉講式	A.M.	予備日	
					P.M.	予備日	
					P.M.	予備日	
第9週	15	30	金	研修生帰国	A.M.	予備日	
					P.M.	予備日	
					P.M.	予備日	
第9週	15	11	2	月	A.M.	予備日	
					P.M.	予備日	
					P.M.	予備日	

運-12	コース名：空港セミナー	定員 10名
------	-------------	-----------

受入期間：56. 9. 24～56. 11. 2

関係省庁：運輸省航空局

受入機関：日本空港コンサルタンツ

国別応募状況：

国名	応募数	受入数	国名	応募数	受入数
インドネシア	2	2			
スリランカ	0	0			
タイ	1	1			
バングラディシュ	1	1			
マレーシア	1	1			
パラグアイ	1	1			
ブラジル	3	2			
ホンデュラス	1	1			
エジプト	2	1			
スワジランド	0	0			
ジンバブエ	0	0			
モロッコ	0	0			
ビルマ	1	0			
フィリピン	1	1			

受入担当：佐々木 幸男

コーディネーター：浜 三枝

昭和56年度集団研修空港セミナー 業務実施報告書

1. 研修の概要

研修日程、講義題目、講師、見学先施設の選定につきましては、貴事業団と運輸省との打合せにより決定されました別紙スケジュール表をご参照願います。打合せ会には弊社担当者も参加の榮を賜り、本研修実施の基本方針、今年度研修員の特性等を早くから理解し得たことは、研修業務の実施上大変有益でありました。

本研修は既に7回の実績を有し、発展途上国にその存在を知られ、多くの国が参加の機会を待っているやに伝え聞いております。しかしながら、発展途上国の中には、研修員の選定や参加への事務手続きに不馴れなところもあり、今年も募集締切日に間に会わず、締切日を延期する必要があったり致しましたが、最終的に10名の参加が決定できましたことは、ひとえに貴事業団の忍耐強い対応の賜物であると考えます。

空港は単に空運と陸運の結節点として定義される交通施設であることを超えて、近年では、それを一つの特殊なコミュニティとして捉える必要に迫られるような、極めて多様で複雑な側面を有しております。そのため、短期間の研修では、どうしてもバタン化したカリキュラムとならざるを得ず、今年の研修につきましても、事前の打合せ会議で過去の研修に対する批判や反省をもとに今年度研修について新しい試みも議論されましたが、それを実施に移すにはもう少し時間をかけて検討することが必要であるとの結論に達し、今年も例年と同じ講義スケジュールとなりました。

講義テキストをアップデートし、事前に研修生に配布しましたが、講師には、これをサブテキストとし、むしろテキストに盛れない話をして貰うように依頼し、講義の単調化を避けるように努めました。

研修旅行については、新東京国際空港、東京国際空港、大阪国際空港のほか、地方中規模空港で建設技術的にも、空港周辺地域計画という面でも特徴のある新秋田空港の見学を組み入れることが事前打ち合わせで提案されたので、これを日程に組み入れました。また今年度は、空港アクセスとして発展途上国で極めて多用されている乗用車の近代的製造工場を研修旅行日程の途中に組み入れ、モータリゼーションの将来について研修生に考えて貰い、空港計画の考え方の巾を広げて貰うことについても事前打合せで提案があり、これも日程の中に加えました。

空港セミナーということではありますが、空港の運用に関係の深い航空交通管制施設および管制官の訓練施設である航空保安大学校や、航空保安施設のメーカーである日本電気株式会社の府中工場の見学も、例年の通りスケジュールに組み入れました。

2. 研修成果

今年度の研修生は、20才台から50才台までの巾広い年齢構成であり、また、専門も経営・建築・土木・電気と多様であったため、講義の理解もまちまちであったと考えられますが、テキストが好評であったことから伺えるように、ゼネラル・コースとして見る限り、概ね成功であったと伝えると同時に、多くの建設的意見や希望が研修生から出されたことは、研修の組み立てに改善すべき問題点のあることが明確になりました。今年度の研修生は、特に意識のレベルが高く感じられましたが、関係者が常々何とかしようと考えていたことが多く、今後の課題として十分検討してゆきたい、と考えております。問題点については次項で述べます。

3. 実施上の問題点

- (1) 講義テキストについては、同一講座については基本的に前年度のテキストを踏襲することが事前に確認されましたが、今年度は講師の変更が多く、そのため、資料のアップデート作業ばかりでなく、テキストの書換え、それに伴う新規翻訳等が相当量発生したため、原稿翻訳謝金の予算を大巾に超過することとなりました。しかしながら、空港というテーマの巾広さ、奥行きを考えると、このような傾向は今後も続くものと考えられます。ただし、その作業の複雑さや困難さを考慮すると、来年度は上記したような再確認や変更部分の早期確定が必要であろうと思われます。
- (2) 研修生の年齢が大巾に開いていたことは、その知識・経験にもそれなりの開きがあることであり、効率的に研修を行うためにはできるだけ狭い年齢層にしぼることが必要だと思えます。
- (3) この集団研修のタイトルが「セミナー」となっているため、研修生の中には違った期待を持っていた者も多く、エバリュエーション・ミーティングの大きなテーマとなったことを付け加えます。
- (4) 空港関係者の専門は広く変化するため、パターン化したカリキュラムでは全員が納得する研修とはなり得ないようです。
- (5) 旅行が多すぎ、全体としてスケジュールがキツイという意見が多かったことは反省する必要があるかと考えます。しかし、中には週末や夜間を移動日として研修旅行をもっと効率的にしたら良いという意見もあつことを付け加える必要があるかと思えます。
- (6) カントリーレポートについては、その趣旨が不明瞭だとの意見がありましたが、確かに、それが研修コースの中で十分に生かされているとは言い難いので、再検討を要する点であると考えます。
- (7) 研修生は英語の話せることが条件となっていますが、スペイン語圏の研修生の中には殆んど話せない者もおりました。
- (8) 研修実施側の語学水準の問題は常に頭の痛い問題であるが、研修生が講義の能率を良くするために英語で講義することを求めているのは背けるどころです。

4. 改善に関する所見

今年度の研修生は例年よりも極めて意識水準が高いこともあって、基本的問題から具体的問題まで、ほとんどの問題点が網羅されて出されて来たと思えます。

しかしながら、その全てを一度に解決することは極めて困難でありますから、来年度は空港セミナーがあくまで集団研修であるという原点を再確認し、その条件の中で実効を挙げることを目的として、研修スケジュールを慎重に立案し、研修内容に適した研修生を選衡し、実施に当っては、実施担当者と研修生との接触機会を増やすこと、の3点を重点的に実行することを提案したいと考えます。

今回の報告書は反省的記述が多くなりましたが、参加者は、全員が将来にわたって資料・情報の配布を求めるなど、空港セミナーに対する大きな期待を示しておりますので、今後とも改善を重ねつつ、よりよい研修コースに育ててゆくことが日本の責務であると痛感しているところであります。

以上

Training Duration from September 24, 1981
to November 2, 1981

Schedule for 8th AIRCROOME SEMINAR

Training Institute

Date	Time	Place		Attendants
Sept. 24(Thu)			Arriving in Japan	
25(Fri)		TIC	Briefing	
26(Sat)			Free	
27(Sun)			"	
28(Mon)		TIC	General Orientation	
29(Tue)		"	"	
30(Wed)		"	"	
Oct. 1(Thu)		"	"	
2(Fri)		"	"	
3(Sat)			Free	
4(Sun)			"	
5(Mon)	10:30-11:00		Courtesy Call to Director of Civil Aviation Bureau, MOI	
	14:00-16:00	TIC	Seminar: General Policies of Civil Aviation & Airport Design Plan	(CAB) Mr. Nakayama
6(Tue)	10:00-12:00	"	Seminar: Airport Planning, Master Plan	(JAC) Mr. Kayashima
	14:00-16:00	"	"	"
7(Wed)	10:00-12:00	"	Seminar: Airport Planning, Apron Plan	(JAL) Mr. Kubo
	14:00-16:00	"	"	"
8(Thu)	10:00-12:00	"	Seminar: Airport Planning, Terminal Building Plan	(JAC) Mr. Shibata
	14:00-16:00	"	Seminar: Airport Planning, NAV-AID Plan	(CAB) Mr. Inoue
9(Fri)	AM		Trip: Tokyo-----Akita	(CAB) Mr. Sanaka (JAC) Miss Kato
	PM		Observation: New Akita Airport	(Stay at Akita) Rich Hotel
10(Sat)	AM		Trip: Akita-----Tokyo	
11(Sun)			Free	

Training Duration from September 24, 1981
to November 2, 1981

Schedule for 8th AERODROME SEMINAR

Training Institute

Date	Time	Place		Attendants
Oct. 12(Mon)	10:00-12:00	TIC	Seminar: Design Standards for Airport	(CAB) Mr. Sanaka
	14:00-15:00	"	"	"
	15:00-16:00	"	Discussion: Observation Tour	
13(Tue)	AM	Narita	Seminar: Airport Administration	Mr. Takesue
	PM	"	Observation: New Tokyo International Airport	(CAB) Mr. Sasanuma
14(Wed)	10:00-12:00	TIC	Discussion: Country Report	(CAB) Mr. Sasanuma
	14:00-16:00	"	"	"
15(Thu)			Observation: Tokyo Area Control Center	(CAB) Mr. Okuyama
16(Fri)	AM	Osaka	Trip: Tokyo-----Osaka	(CAB) Mr. Kitamura
	PM	"	Observation: Osaka International Airport	(JAC) Miss Kato (Stay at Osaka) Shampia Hotel
17(Sat)	AM	"	Observation: Morita Pump Co.	
	PM	Kyoto	Trip: Osaka-----Kyoto	(Stay at Kyoto) Dai2 Tower Hotel
18(Sun)		"	Free	
19(Mon)	AM	Nagoya	Trip: Kyoto-----Nagoya	
	PM	"	Observation: Nagoya Airport	(Stay at Nagoya)
20(Tue)	AM	"	Observation: Toyota Automobile Co.	
	PM	"	Trip: Nagoya-----Tokyo	
21(Wed)			Observation: Nippon Electric Co.	(NEC) Mr. Okamoto
22(Thu)	AM	Haneda	Observation: Japan Air Line, Training Center	(CAB) Mr. Eto
	PM	"	Observation: Tokyo International Airport	(JAC) Miss Kato
23(Fri)			Observation: Port & Harbour Research Institute	(JAC) Miss Kato
24(Sat)			Free	
25(Sun)			"	

Training Duration from September 24, 1981
to November 2, 1981

Schedule for 9th AERODROME SEMINAR

Training Institute

Date	Time	Place		Attendants
Oct. 26(Mon)	AM	Haneda	Observation: Aeronautical Safety College	(CAB) Mr. Eto (JAC) Miss Kato
	14:00-16:00	TIC	Seminar: International Cooperation Programs	(CAB) Mr. Higeta
27(Tue)			Observation: Mitsubishi Heavy Industry	(JAC) Mr. Fujiki
28(Wed)		TIC	Report Writing	(CAB) Mr. sasanuma
29(Thu)	AM	"	"	"
	PM	"	Evaluation Meeting	(CAB) M/S Higeta, Sasanuma (JAC) Mr. Hayashi
30(Fri)		"	Closing Seremony	
31(Sat)			Free (Preparation to Return Home)	
Nov. 1(Sun)			"	
2(Mon)			"	
			(CAB) Civil Aviation Bureau	
			(JAC) Japan Airport Consultants	
			(MOT) Ministry of Transport	
			(JAL) Japan Air Line	
			(NEC) Nippon Electrical Co.	

運-13	コース名：気象学	定員 6名
------	----------	----------

受入期間： 56. 10. 1 ~ 57. 1. 29

関係省庁： 気象庁

受入機関： 日本気象学会

国別応募状況：

国名	応募数	受入数	国名	応募数	受入数
インドネシア	1	1			
スリランカ	1	1			
タイ	1	1			
大韓民国	0	0			
フィリピン	1	1			
マレーシア	0	0			
香港	1	1			
シェラ・レオーネ	0	0			

受入担当： 村上 博

コーディネーター： 佐藤 千鶴子

56年度 気象学研修評価会について(報告)

1. 日 時 昭和57年1月27日 15:30～17:30
2. 場 所 TIC第1会議室
3. 出 席 者 Mr. Arnulfo T. Tayam (フィリピン)
Miss Rosrin Swangpong (タイ)
Mr. T. Ananda Peiris (スリ・ランカ)
Mr. Yeung Ka-Yun (香 港)
Mr. Chalik Wahab (インドネシア)
- 金 田 繁三郎 気象庁総務部企画課国際協力班・外事官
田 畑 明 “ 観測部測候課
笠 井 利 之 研修事業部研修第一課
村 上 博 “
佐 藤 千鶴子 研修監理員

4. 研修員の意見及び要望要旨

(1) GI, 来日前ブリーフィングについて

スリ・ランカ、インドネシアの場合は本人に受入通知されるのが来日直前であった(4～5日)。また、JICA事務所、日本大使館でのブリーフィングは、香港の場合は丁寧であったが他の場合は航空券を受け取るのみか、ごく簡単な説明を受けたのみであった。

(2) 集合ブリーフィング及びGeneral Orientation

研修員全員が役立ったと答えたが、東京の地図については日本語名も入れた方が対比でき、道を聞く場合も便利であろうとの意見が出た。

(3) プログラムについて

1日の研修時間については、現在4～4.5H/dayで実施しているが、各研修員により短かいとか適当だとか意見が様々であった。

また、本コースは気象レーダーのOperationとMaintenanceの両方を扱っているが、参加国の内、香港を除いてレーダーのOperationとMaintenance両部門間の人事交流が全く無い為、どちらかの研修に絞る必要があるとの意見が出た。

(4) その他

○TICでの生活は全般的には良かったが、各個室にバス・トイレが無く不便であった。また中南米からの研修員が夜遅く酒気を帯びて騒ぐことがあり、TICでもっと注意を徹底して欲しい等の意見があった。

○全体的には研修員の満足度は高いように見受けられた。

5. 担当のコメント

(4-1)について)一部の研修員は来日前ブリーフィングを全く受けていないで来日しているが、受入れをスムーズにする為にもぜひ実施方徹底願いたく、繁忙な為実施困難な場合も何らかの工夫をし(ペーパ

ーに書いて渡す etc.), 必要最小限の予備知識は与えておくようにする必要がある。

G Iについても、来日数日前に研修員に手渡されたり、また手渡されなかった例もあり、当方で実情を把握する必要はあるが、特にひどい場合は、先方政府に善処方申し入れる事も考えるべきであろう。

(4 - ②について) 参加国の多くは Operation と Maintenance とは完全に区別されており、したがって、現行の研修 (両方の研修を目的としている) では真の研修ニーズには合わず、且つ、G I の研修内容の記載事項では応募国側もどちらの分野から応募者を出すか迷っていることも考えうる。

これについては重要な問題であるので是非共、再検討することが望まれる。またこれに関連し、現在隔年で一般気象学とレーダーとを交互に実施しているが、先方政府 (昨年度と今年度の本コースの例ではタイ国) に選考の混乱が見受けられ、この点についても併せ、検討を要する。

上記の検討事項について、気象庁に相談したところ気象庁としては本コースについては World Meteorology Organization (W.M.O.) の台風委員会の要望に基づいて始められており、簡単には変えられないとの見解を示している。

しかしながら本コースは、国際機関ベースのコースではなく、あくまで、J I C A が関係機関と協議の上リーダーシップをとりつゝ実施すべきものであり、協議の上変える方が望ましいと結論された場合は当然そのようにすべきものである。

以上の状況から、今後の気象庁との協議においては、まず本コースの役割から始め、実施までの流れを再度ブリーフィングし、J I C A ・気象庁の役割を再確認しておかねばならないと思料する。

以 上

56年度 気象学コースに係る研修反省会について

1. 目 時 昭和57年2月15日 14:00～16:00
2. 場 所 JICA 第9会議室
3. 出席者 (1) 気象庁観測部測候課・調査官 下 島 省 吾
(2) " 気象大学校教授 藤 本 文 彦
(3) " 総務部企画課国際協力班・外事官 金 田 繁 三 郎
(4) 研 修 監 理 員 佐 藤 千 鶴 子
(5) 研修事業部研修第一課課長代理 笠 井 利 之
(6) " 村 上 博

4. 討議内容要旨

- (1) 担当より、本コースはJICAが気象庁に依頼し実施するものであり、変更についてWMO台風委員会の決定に必ずしも従がう必要性は無い旨述べた。(これについては、別添参考資料“台風専門家会議出席報告書”によれば研修については日本側からの報告マターであり、台風委員会の決定によるという事は気象庁担当の記憶違いと思われる。)
- (2) Operation と Maintenance の区別については切り離しは無意味であり、現在の研修形態で十分と思われる。但し、先方に誤解または混乱を引き起こさないようGIの内容について十分再検討することとした。(例えば、Purposeの欄のMaintenanceの前にpreventiveを付けるとか、qualificationの欄のelectronicsを入れるかどうか?)
- (3) 一般気象学と気象レーダーとを隔年で実施する体制については、更に今後の検討を重ねることとした。

5. その他要望事項

(1) JICAより気象庁への要望

- ・初日の気象庁オリエンテーションは現在半日間であるが、1日かけた方がより理解を深め4ヶ月の研修に役立つ。
- ・カントリーレポートは現在の半日から1日に延長したい。
- ・研修開始後早い時期に研修旅行を入れる事は、本年度の経験から、効果が上がるので今後も続けたい。
- ・航空気象レーダー、衛星センター見学、アメダス見学等は何れの部門にも共通の興味を持たせるので今後も予報、レーダーを問わずプログラムに入れることを希望する。
- ・変化をもたせる為の工夫も必要。(例、南極体験談等)
- ・今後も同一講師につき1日以上以上の形態を続けたい。また、テキストの棒読み講義は避け、視聴覚機材のより一層の利用を要望する。(但し、あらかじめJICA担当に相談する。)
- ・来年度の一般気象学については、テキストを日程(案)作成と同時にとりまとめを開始するよう依頼。(予算上、テキストの印刷・製本が可能か否かは不明とした。)
- ・プログラム作成及び実施時に応用度(低緯度と中緯度の差、参加国と日本とのレベル差等)を常に考慮に入れることは重要である。

(2) 気象庁よりJICAへの要望

- カントリーレポートは前もって手に入れたい。
(57年度より要請書と同時に提出させるよう義務づけるので可能……担当コメント)
- レーダー研修の場合、メーカーへの研修の依頼は、JICAでやって欲しい。(含経費)
(要検討……担当コメント)

以上

気象レーダー研修日程表

(香港, マレーシア, 韓国, フィリピン, インドネシア, タイ, スリランカ, シェラレオーネ, 8名)

月日(曜)	場 所	A M (10h~12h)		P M (14h~16h)		通 訳 要○否
		講 師	研 修 項 目	講 師	研 修 項 目	
1981年 10. 1(木)	TIC		ORIENTATION		同 左	
2(金)	"		"		"	
3(土)	-----	-----	-----	-----	-----	
4(日)	-----	-----	-----	-----	-----	
5(月)	TIC		ORIENTATION		同 左	
6(火)	"		"		"	
7(水)	"		"		"	
8(木)	"		"		"	
9(金)	"		"		"	
10(土)	-----	-----	-----	-----	-----	
11(日)	-----	-----	-----	-----	-----	
12(月)	JMA	(企画) 安田	ORIENTATION	(測候)下島	カントリー レポート発表	
13(火)	"	(測候) 下島	レーダー基礎技術	田 畑	"	○
14(水)	"	" 田畑	"	"	"	○
15(木)	"	" "	"	"	"	○
16(金)	"	" 片桐	"	同 左	"	○
17(土)	-----	-----	-----	-----	-----	
18(日)	-----	-----	-----	-----	-----	
19(月)	JMA	(測器) 桜岡	レーダー保守技術	同 左	同 左	○
20(火)	"	" "	"	"	"	○
21(水)	札幌・千歳航	(測候)(現地) 田畑 { 藤 { 遠藤 { 齊藤	地方レーダー実習 (千歳空港)	同 左	同 左	○
22(木)	"	" "	"	"	"	○
23(金)	"	" "	"	"	"	○
24(土)	"	" "	"	"	"	○
25(日)	函館・函館山	" 三浦	地方レーダー実習 (海洋気象台)	"	"	○
26(月)	"	" "	地方レーダー実習	"	"	○
27(火)	"	" "	"	"	"	○
28(水)	"	" "	"	"	"	○

月日(曜)	場 所	A M (10h~12h)		P M (14h~16h)		通 訳 要○否
		講 師	研 修 項 目	講 師	研 修 項 目	
1981年 10.29(木)	JMA	(測器) 桜岡	レーダー保守技術	同 左	同 左	○
30(金)	"	"	"	"	"	○
31(土)	_____	_____	_____	_____	_____	
11. 1(日)	_____	_____	_____	_____	_____	
2(月)	"	"	"	"	"	○
3(火)						
4(水)	松下電送 (茅ヶ崎)	(測候) 片桐	FAX 工場見学	同 左	同 左	
5(木)	東航(羽田)	(東航) 中山	レーダーの航空への利用	同 左	同 左	○
6(金)	新東航 (成田)	(新東航) 富永	"	"	"	○
7(土)	_____	_____	_____	_____	_____	
8(日)	_____	_____	_____	_____	_____	
9(月)	三菱電機 (尼ヶ崎)	萩原・橋本	メーカー研修会社紹介	同 左	同 左	
10(火)	"	" "	" ドップラーレーダー	"	"	○
11(水)	"	" "	" レーダー雨量計	"	"	
12(木)	"	" "	" 雷電検出用レーダー	"	"	○
13(金)	"	" "	" 工場見学	"	"	○
14(土)	_____	_____	_____	_____	_____	
15(日)	_____	_____	_____	_____	_____	
16(月)	JMA	(測候) 田畑	レーダー観測技術	同 左	同 左	○
17(火)	"	"	"	"	"	○
18(水)	JMA	(測器) 桜岡	レーダー保守技術	同 左	同 左	○
19(木)	"	"	"	"	"	○
20(金)	"	"	"	"	"	○
21(土)	_____	_____	_____	_____	_____	
22(日)	_____	_____	_____	_____	_____	
23(月)	_____	_____	_____	_____	_____	
24(火)	東芝電気 (小 向)	和田・渥見	メーカー研修 レーダーシステム	同 左	同 左	○
25(水)	"	" "	アンテナコントローラ-/ シグナルプロセッシング	"	"	○
26(木)	"	" "	アンテナコントローラ- レーダー雨量計	"	"	○
27(金)	"	" "	アンテナコントローラ- カラーディスプレイ	"	"	○
28(土)	_____	_____	_____	_____	_____	

月日(曜)	場 所	A M (10h~12h)		P M (14h~16h)		通 訳 要○否
		講 師	研 修 項 目	講 師	研 修 項 目	
1981年 11. 29(日)	—	—	—	—	—	
30(月)	東芝電気 (小 向)	和田・渥見	メカ-研修東芝科学館	同 左	同 左	○
12. 1(火)	"	" "	" Tx,Rxビデオ電送	"	"	○
2(水)	"	" "	" 工場見学	"	"	○
3(木)	日本無線 (三 鷹)	吉 田	メカ-研修レーダシステム	同 左	同 左	○
4(金)	"	"	" レーダ-雨量計	"	"	○
5(土)	—	—	—	—	—	
6(日)	—	—	—	—	—	
7(月)	"	"	" M T I	"	"	
8(火)	"	"	" ドブラレーダ-	"	"	○
9(水)	"	"	" 新日本無線見学	"	"	
10(木)	"	"	" 衛星の歴史-受信機	"	"	○
11(金)	"	"	" 工場見学	"	"	○
12(土)	—	—	—	—	—	
13(日)	—	—	—	—	—	
14(月)	JMA	(MC) 柴田	レーダ-測定器技術	同 左	同 左	
15(火)	"	"	"	"	"	
16(水)	アメダスセンタ (大手町)			(Amedas) 善如寺	アメダス技術 (13h~17h)	○
17(木)	名古屋	(測器) (現地) 磯野 野村	地方レーダ-実習	同 左	同 左	○
18(金)	"	" "	" マグネトロン交換	"	"	○
19(土)	"	" "	" 予報への利用	"	"	○
20(日)	大阪・高安山 ・大阪航	" (現地) 坂中・滝野	" 地震・津波	"	"	○
21(月)	"	" "	"	"	"	○
22(火)	"	" "	"	"	"	○
23(水)	"	" "	" 大阪空港	"	"	○
24(木)	JMA	(予報) 梶間	レーダ-の予報への利用	同 左	同 左	○
25(金)	"	"	"	"	"	○
26(土)	—	—	—	—	—	
27(日)	—	—	—	—	—	
28(月)	—	—	—	—	—	
29(火)	—	—	—	—	—	

月日(曜)	場 所	A M (10h~12h)		P M (14h~16h)		通 訳 要○否
		講 師	研 修 項 目	講 師	研 修 項 目	
1981年 12.30(水)	---	---	---	---	---	
31(木)	---	---	---	---	---	
1982年 1. 1(金)	---	---	---	---	---	
2(土)	---	---	---	---	---	
3(日)	---	---	---	---	---	
4(月)	---	---	---	---	---	
5(火)	東京管区 (大手町)	(東管)小野木	レーダーの操作・ 伝送の実習	同 左	同 左	○
6(水)	"	"	"	"	"	○
7(木)	"	"	"	"	"	○
8(金)	"	"	"	"	"	○
9(土)	---	---	---	---	---	
10(日)	---	---	---	---	---	
11(月)	MRI (筑波)	(MRI) 青柳	レーダーの応用技術	同 左	同 左	
12(火)	"	" 内藤	ライダー、ソーダー、衛 星リモートセンシング	同 左	同 左	
13(水)	"	" 青柳	レーダー特殊技術	同 左	同 左	
14(木)	"	" "	研究所内見学・ 筑波市内見物	"	"	○
15(金)	---	---	---	---	---	
16(土)	---	---	---	---	---	
17(日)	---	---	---	---	---	
18(月)	DPC (清瀬)	(測候) 片桐	気象衛星センター 施設見学	同 左	同 左	○
19(火)	YHP (北八王子)	(測器) 磯野	測定器工場見学	同 左	同 左	○
20(水)	JMA	(測候) 下島	レーダー雨量計 関東地方建設局見学	中 山	下層の風のシア について	○
21(木)	"	(測候) 片桐	"	同 左	"	○
22(金)	"	(測器) 桜岡	レーダー保守技術	同 左	同 左	○
23(土)	---	---	---	---	---	
24(日)	---	---	---	---	---	
25(月)	TIC		REPORT WRITING		同 左	
26(火)	"		"		"	
27(水)	"		閉講式 "		"	
28(木)	"		"		"	
29(金)						

選-14	コース名：船員教育行政	定員 8名
------	-------------	----------

受入期間： 56. 10. 15～56. 11. 21

関係省庁： 運輸省船員局

受入機関： 同上

国別応募状況：

国名	応募数	受入数	国名	応募数	受入数
インドネシア	1	1			
シンガポール	2	1			
タイ	1	1			
フィリピン	2	1			
マレーシア	1	0			
ジャマイカ	0	0			
ブラジル	1	1			
フィジー	1	1			
エジプト	2	1			
象牙海岸	1	1			
タンザニア	1	1			
イラン	1	1			

受入担当： 佐々木 幸男

コーディネーター： 有馬 新七

船員教育行政コース実施概要について

船員教育行政コース (ADMINISTRATION FOR SEAMEN'S EDUCATION) は今年で11年目を迎え、今迄約110人の研修受入実績がある。受入対象国は、東南アジア地域40%、中南米地域20%、中近東地域20%、アフリカ地域20% (加重平均) となっており定員8名の枠組にしては、対象国に極立った偏りがないのも特徴の一つである。本コースの実施母体になっているのは、運輸省船員局 (教育課) であるが、船員教育行政という項目には福祉面、管理行政面、実業面、教育行政面の4主要項目がある為、海運局、社会保険庁、海難審判庁、民間船社、造船会社、船舶技術研究機関等、研修計画上多種多様のからみがあり、どの項目も1日以上を費すことができない難点があり研修員にとっては大まかなさわりだけで終わってしまったという印象がぬぐえない。

研修項目には、別添の様な状況につけ加えて最近では、余剰船員を抱え込んでいる日本とは異腹に、各国に船員職離脱の傾向がある為、躍起になって船員職への誘致 INCENTIVE の対策中であり、雇用促進政策をも本コースで取扱う矛盾が生じている。実際には船員雇用低迷に直面している日本では、MO (エムゼロ) 船 (全航行操作コンピューター化) の導入による合理化対策の気運がある為、船員雇上からは日本の各国との格差は著しい。又、船員の資質向上と資格統一の為の STCW 条約 (船員の訓練及び資格証明の基準に関する国際条約; 現在法制局で比準に関する調整を行なっている) とのかねあいもあり、本条約の地ならしの作業で本コースでは取扱っているが、現実的には技術訓練の行政組織化という観点で基本的作業段階である。本コースには徹底的に重視する項目はないので世界の情勢を見極めめた上での対応が望まれる。昭和56年度コースのエバリュエーションの結果は以下の通り。

1. 本コースの研修項目は講義・実習・見学共十分である。
2. しかし、項目が多いのと DURATION が短いので、深く問題解決について討議することができなかった。
3. 船舶技術 (機器)、造船技術で一日とられるのは改善の余地がある。特に、CAVITATION PITCH などは、本国内船舶機器と比較すると余りにも格差がある。
4. 日本の航海訓練所には、立派な訓練船がある。訓練船の有無が教育の充実強化に密接に結びついて、大きな効果を生み出すことは明らかであり、自国にもあれば良いと思う。
5. 同時に訓練機材 (PILOTAGE SIMULATION 等) の豊富さは目を瞠るばかりである。
6. 研修中一貫して、大型船や商船 (外資対象) に主眼を置いている印象があるが、自国内では小型船 (フレッチャー型) や漁船の船員は無視できない数になっているので今後はその対応をも望みたい。

(以上概略のみ。)

昭和56年度 船員教育行政研修日程

船員局教育課

月日	曜	午 前	午 後	行動予定	宿 泊
10. 15	木	来 日			東 京
16	金	ブリーフィング	ブリーフィング		〃
17	土	休 日			〃
18	日	休 日			〃
19	月	オリエンテーション	オリエンテーション		〃
20	火	〃	〃		〃
21	水	〃	〃		〃
22	木	〃	〃		〃
23	金	〃	船員局挨拶		〃
24	土	休 日			〃
25	日	休 日			〃
26	月	日本海運の現状(海運局)	船員行政一般(労政課)		〃
27	火	船員法概要(労働基準課)	船舶職員法概要(船舶職員課)		〃
28	水	船員教育全般(教育課)	船員教育機関(教育課)		〃
29	木	日本郵船(株)研修所見学		東京 → 横浜	〃
30	金	船員労働と組合(労政課)	船員災害と衛生(安全衛生室)		〃
31	土	休 日			〃
11. 1	日	休 日			〃
2	月	海技試験制度(海技試験官)	東京商船大学見学	都内移動	〃
3	火	休 日			〃
4	水	練習船教育(航海訓練所)	船員保険福祉(社会保険庁)		〃
5	木	住友重機械(株)追浜造船所見学		10:30-12:00 東京→横須賀	〃
6	金	海難審判概要(海難審判庁)	船員雇用と失業対策(雇用対策室)		〃
7	土	休 日			〃
8	日	休 日			〃
9	月	航海訓練所練習船青雲丸見学		東京 → 横浜	〃
10	火	清水海員学校見学		東京→清水→ 名古屋	名古屋
11	水	鳥羽商船高等専門学校見学		名古屋→鳥羽	鳥 羽
12	木	(移 動 日)		鳥羽 → 神戸	神 戸
13	金	海技大学校見学			〃

運-15	コース名： 鉄道電化高速運転	定員 8名
------	----------------	----------

受入期間： 56. 10. 15～56. 12. 18

関係省庁： 運輸省鉄道監督局

受入機関： 日本国有鉄道，鉄道電化協会

国別応募状況：

国名	応募数	受入数	国名	応募数	受入数
インド	1	1			
スリランカ	1	1			
大韓民国	1	0			
パキスタン	0	0			
バングラデシュ	2	1			
アルゼンティン	2	1			
チリ	2	1			
ブラジル	4	2			
メキシコ	2	1			
エジプト	2	1			
ザイール	2	1			

受入担当： 石田 幸男

コーディネーター： 等々力 俊光

昭和56年度 鉄道電化・高速運転コース
の エバリュエーションミーティング

日 時 56年12月16日(水) 13時30分～16時00分
場 所 東京国際ナショナルセンターセミナーF
出 席 者 研 修 員 10名
運輸省(堤) 鉄道電化協会(久保田) JICA(石田・等々力)

I ジェネラル・インフォメーションについて

- 来日前に読んだか、コメントは
 - ・研修生の大部分が読んできている。
 - ・2か月前にG.Iをもらったが受入通知は来日の10日前であった。(ザイール)
 - ・G.Iにもっと具体的日程を入れてほしい。できれば旅行中の宿舎も。(ブラジル)

II ジェネラル・オリエンテーションについて

- 有意義であったか、1週間は十分か、付加すべき課題はあるか
 - ・1週間付加し2週間とし、半日はオリエンテーション、半日は日本語研修したらいい。(インド)
 - ・日本語の生活用語についての研修をしてほしい。(バングラデシュ)
 - ・1週間の日本語集中コースをもうけてほしい。(ザイール)
 - ・オリエンテーションの1クラスの時間をもっと長くしてほしい。(スリランカ)
 - ・日本のスポーツについての講義を付加(スリランカ)
 - ・全員有意義であったとのこと。特にめだったのは日本語の集中コース(1週間)をもうけてほしいということ。

III 研修期間について

- 長すぎるか、短いか、ちょうどいいか
 - ・相対的に期間が短いという意見が多かった。
 - ・集団としてはちょうどいいが、個別研修を少し加えてほしい。(バングラデシュ)
 - ・見学を多くし、説明にもっとゆっくり時間をかけてほしい。(メキシコ)
 - ・高速運転に関する講義をもっとしてほしい。(ブラジル)
 - ・日本語コース1週間、研修旅行のあとディスカッションの時間をもうける。(インド)

IV 講義について

- 特によかった講義は、よくなかった講義は、付加すべき講義は
 - ・電力供給設備、軌道における速度向上策経費節減策、電気車両の保守、鉄道電化の効用、新幹線概論、運転保安設備、電気車両、など特によかった講義としてあげられた。
 - ・交通システムについての講義を付加してほしい。(チリ)
 - ・ノイズの問題についての講義を付加してほしい。(アルゼンティン)
 - ・講義は高い水準であったが、非常によかった。(スリランカ)
 - ・電車線のデザインについての講義を付加してほしい。(インド)

V 研修見学について

- 特によかった見学先, よくなかった見学先, コメントは
 - ・大宮工場, 鉄道技術研究所, 阪急車両, 日立製作所, 中央鉄道学園, 新幹線コントロール室, など特によかった見学先としてあげられた。
 - ・東京の地下鉄については, 最初の方にもってくれば東京全体のシステムを理解するのに役立つ。
(ブラジル)
 - ・秋田CTCは遠いわりに得るものが少なかった。(ブラジル)
 - ・大宮工場については, 2~3時間がほしかった。(スリランカ)
 - ・長野運輸場, 東京第一操作場では時間が少なかった。(インド)

VI 全体の評価について

- ・全員が本コースに参加できて非常に満足であったとのこと。
- ・可能ならあと1カ月延長したいとのこと。
- ・言葉の問題がなかった。(通訳率100%)
- ・1週間の日本語集中コースを全員希望していた。

研修期間 S56.10.15 ~ S56.12.18 (2カ月)

人数 10名

担当コメント

- ・実質1.5カ月のコースでは, 技術移転までむりだとしても, 日本の鉄道電化について広く知ってもらうには適当なコースであった。
- ・研修員の評価も高かった。
- ・コースの内容から高速運転に関するものが少ないので, コースのネーミングを鉄道電化コースとすればすっきりすると思う。

鉄電協第121号
昭和57年1月16日

国際協力事業団

理事 大槻章雄 殿

社団法人 鉄道電化協会
会長 寺井 勝

研修実施報告書

さきに委託を受けました貴事業団の集団研修につき、下記
のように報告いたします。

記

1. 研修科目 鉄道電化—高速運転
2. 研修員氏名 Mr. M. Rangachari 国籍インド
他9名
3. 研修期間 昭和56年10月15日～
昭和56年12月18日
(日程別表)
4. 研修場所 渋谷区ホテルサンルート東京、鉄道電化協会
その他(国鉄、民鉄及びメーカ等の現場見学)

5. 研修経過 別表予定日程表に従つて実施したほか、11月
14日(土)午前中、研修員の希望により追加と
して品川駅構内において電気検測車の見学を
行つた。

6. 研修経費精算書 別紙のとおり

7. 研修の成果

研修員の研修態度は非常にまじめであり、多くの智識を得
て自分のものにしようとする姿が見受けられた。

以下項目別に挙げる。

(1) 講義について

非常に判りやすく説明されたので良く理解できた。

テキストの内容も適当であつた。

なお一部研修員から電化計画に必要な基本的計算例がほ
しいとの希望があつた。

(2) 見学について

各見学先の生産性の良いのに驚いた。

少数の人員で多くの製品を生産したり、乗客を誘導整理
するなど自動化の進んでいるのが良く判つた。

なお一部研修員から見学時間が短いので長くしてほしい
と言ひ希望があつた。

(3) その他

日本の社会全般が秩序の良い事と敗戦後の短日月でよく
これだけの国力を培かつた事は驚きである。

一般に言葉の障害が多く見受けられるので研修を含めて
期間を延長して日本語の勉強も必要であるとの希望もあ
つた。

昭和56年度 鉄道電化・高速運転コース研修行程

56. 9. 14訂正

月日	曜	行 程	宿泊地	記 事
10. 15	木	}	TIC	JICA
16	金			
17	土			
18	日			
19	月			
20	火			
21	水			
22	木			
23	金			
24	土			
25	日	"		
26	月	10:30~11:30 運輸省あいさつ 13:30~14:00 外務部あいさつ 14:00~16:00 東京 駅		運輸省外務部 東京南局
27	火	(講義) 9:30~12:00 国鉄概論 13:30~16:00 国鉄の技術開発		外務部技開室
28	水	(") 9:30~12:00 鉄道電化の効用 13:30~16:00 電化の現状、電化計画		電 気 局
29	木	(") 9:30~16:00 電力供給設備		"
30	金	(") 9:30~16:00 電車線路設備		"
31	土	自 由		
11. 1	日	"		
2	月	(講義) 9:30 ~ 16:00 電気車両(車両の性能と保守)		工 作 局
3	②	自 由		
4	水	9:30~11:30 大宮工場 14:30~16:30 大井町変電区		大宮工場局 東京南局
5	木	9:30~11:00 東給電指令室 13:00~15:00 川崎発電所		東給電局
6	金	10:00~12:00 鉄道技術研究所 14:00~16:00 中央鉄道学園		技 研 学 園
7	土	自 由		
8	日	"		
9	月	(講義) 9:30~16:00 軌道における速度向上策・経費節減策		施 設 局
10	火	(") 9:30 ~ 16:00 信号保安・電気通信 16:30~17:30 鉄道電化協会		電 気 局 鉄道電化協会
11	水	8:00(7:30)より 9:57 上野3号 9:57 黒磯 黒磯セクションSS 黒磯普通岡本 10:00~11:20 三和テッキ 11:30 12:21 14:00~16:00	宇都宮	東京北局 三和テッキ
12	木	9:30~12:00 日本信号 13:06 宇都宮 普 川島 14:21 日本コンクリート 川島 普 宇都宮 14:30~16:30 16:37 17:34	"	日本信号 日本コンクリート
13	金	10:00~12:00 古河電工 14:19 日光 6号 17:06 上野		古河電工

月日	曜	行 程	宿泊地	記 事
11. 14	土	自 由		
15	日	"		
16	月	8:03 つばさ 15:55 上野 1号 秋田	秋 田	
17	火	10:00~11:30 12:35 羽後 14:16 14:30~16:00 秋田局 CTC 秋田 4号 酒田 酒田 SS	酒 田	秋 田 局 新 潟 局
18	水	8:12 いちほ 11:07 13:00~14:30 15:09 いちほ 18:33 酒田 2号 長岡 信濃川発電所 長岡 4号 上野		東 給 電 局
19	木	9:30~11:00 13:00~16:00 新幹線総合指令所 第京第一運転所		新 幹 線 総 局
20	金	(講 義) 9:30~16:00 新 幹 線 概 論		"
21	土	自 由		
22	日	"		
23	①	"		
24	火	(講 義) 9:30~12:00 13:30~16:00 運 転 保 安 管 理 車 両 検 修 作 業		運 転 局
25	水	(") 9:30~16:00 運 転 性 能 管 理		"
26	木	(") 9:30~12:00 13:30~16:00 運 転 設 備 列 車 計 画 ダ イ ヤ		"
27	金	(") 9:30~16:00 運 転 保 安 設 備		"
28	土	自 由		
29	日	"		
30	月	9:46 あさま 12:59 14:30~16:00 上野 5号 長野 長野 運 転 所	長 野	長 野 局
12. 1	火	8:55 しの 11:52 普 13:53 14:20~16:00 16:41 普 17:27 ひかり 18:34 長野 4号 多治見→春日井 日本碓子 春日井→名古屋 157 新大阪	大 阪	長 野 局 日 本 碓 子 阪 急 電 鉄 住 友 金 属
2	水	10:00~11:30 阪 急 電 鉄	"	住 友 金 属
3	木	10:00~12:00 川崎重工(兵庫工場)	"	川 崎 重 工 新 幹 線 総 局
4	金	10:22 ひかり90 13:32 新大阪 → 東京		
5	土	自 由		
6	日	"		
7	月	10:00 ~ 17:00 帝都高速度交通営団		交 通 営 団
8	火	(講 義) 9:30~12:00 13:00~1600 電 気 車 両 の 保 守 補 講		鉄 道 電 化 協 会 電 気 局
9	水	9:10 ときわ 11:09 13:00~16:00 上野 5号 常陸多賀 日立製作所	水 戸	日 立 製 作 所
10	木	日立製作所	"	
11	金	9:30~12:00 13:33 ひたち12号 15:19 日立電線 日立 → 上野		
12	土	自 由		
13	日	"		
14	月	9:30~11:00 14:00~16:00 東京モノレール 日本電気		東 京 モ ノ レ ー ル 日 本 電 気
15	火	レポ-ト作成		

月日	曜	行 程	宿泊地	記 事
12. 16	水	エバリュエーション, 閉講式		
17	木	帰 国 準 備		
18	金	帰 国		

運-16	コース名：海洋物理調査	定員 8名
------	-------------	----------

受入期間： 56. 11. 5 ~ 57. 3. 15

関係省庁： 海上保安庁水路部

受入機関： (財)水路協会

国別応募状況：

国名	応募数	受入数	国名	応募数	受入数
インドネシア	2	1			
シンガポール	1	0			
タイ	2	1			
大韓民国	2	1			
中国	1	1			
パキスタン	0	0			
バングラデシュ	2	2			
ビルマ	0	0			
フィリピン	1	1			
マレーシア	2	1			
チリ	2	1			

受入担当： 村上 博

コーディネーター： 平野 偉

昭和56年度 海洋物理調査コース 研修実施報告書

1. 研修実施概要

(1) 研修期間

昭和56年11月9日から昭和57年3月12日まで

(2) 研修実施機関

海上保安庁水路部

(3) 主たる研修場所

海上保安庁水路部

(4) 研修応募割当国及び国別応募・受入れ人数

イ) 応募割当国 11か国

ロ) 応募国及び応募人数 8か国12名

ハ) 受入れ国及び人数 8か国 9名

ニ) 詳細は添付資料1のとおり

(5) 研修員

8か国 9名

2. 研修実施カリキュラム

添付資料2のとおり。

3. 研修実施プログラム

添付資料3のとおり。

4. 会計報告

(1) 収支決算

略

5. 研修の目的及び結果について

(1) 研修の目的

アジア太平洋地域における開発途上国の水路部、又は関係機関において海洋物理調査に従事する技術者に対し、講義・実習・見学等を通じ、我が国における最新の海洋物理調査に関する理論及び技術を研修させ、これら諸国における海洋物理調査技術の向上を図るとともに、あわせて我が国とこれら諸国との友好関係を更に深め、海洋調査分野における相互協力体制を強化することを目的とする。

(2) 研修の結果

今年度の本研修コースについては、研修開始当初海洋物理調査分野における研修員の理論的・技術的知識に格差がみられ、また中国からの研修員については英語会話上若干の難点がみられたが、講師及び研修監理員の努力並びに研修員本人の熱心な姿勢により、研修上の支障はまったく見られず、所期の目的を十分達成したと思料される。

一方、本研修コースに対する研修員の要望事項として、実習時間の増加を求める声が特に強い。当コースの実習は、その性格上、大型・小型測量船艇を使用し、多数の指導官と観測機材を必要とするため、多額の経費が必要であるが、これらの実習の成否は本コースの研修効果に影響を及ぼすところが大きいので、今後も特に実習面における充実を図りたいと考えている。

また、講義についても大概研修員の満足を得ているが、専門技術に関する教材・視聴覚教材を整備することができれば更に充実した講義ができるものと思われる。

なお、本コースの主流にあたる海洋観測実習及び潮汐潮流観測実習は、ほとんどが船上作業であるのでコミュニケーションの欠如は直ちに生命に危険を及ぼすこととなる。従って、本研修においても常時、研修員間の相互理解とコミュニケーションを円滑に行う必要があるので、本コースの成功には研修監理員の果たす役割は極めて重要なものであるといえる。また、本コースの理論及び技術は物理・化学を始め数学・電子工学・天文学・航海学等あらゆる分野の科学から成り立っており、これらの知識を豊富にするとともに理解しなければならない本コースの研修監理員の努力は講師及び指導官のみならず、研修員からも高く評価されている。

添 付 資 料

- 資料 1 : 研修応募割当国及び国別応募受入れ人数
- 資料 2 : 研修実施カリキュラム
- 資料 3 : 研修プログラム

資料 1

研修応募割当国及び受入れ人数

応募割当国	応募人数	受入れ人数
バングラデシュ	2	2
ビルマ	0	0
中華人民共和国	1	1
インドネシア	1	1
大韓民国	2	1
マレーシア	1	1
バキスタン	0	0
フィリピン	1	1
シンガポール	0	0
タイ	2	1
チリ	2	1
合計	12	9

資料 2

研修実施カリキュラム

1. 講義(海上保安庁水路部研修室)

講義科目	日数
General aspect of physical oceanography	1.0日
Offshore physical oceanography	6.0
Wind waves	2.0
Calibration of thermometrical instruments	2.0
General aspect of oceanographic instruments	3.0
Chemistry of sea water	3.0
Practice on handling of instruments	1.0
Data processing of oceanographic observation	6.0
Tides	7.0
Tidal currents	5.0
Data processing of tidal currents observation	6.0
General aspect of marine pollution research	3.0
Oceanographic data management	2.0
Special studies	3.0
合計	50.0

2. 実習

実習科目	実習内容	実習地等	日数
海洋観測実習	各層観測・GEKによる海流観測・STD, DBT, XBT及びMBTによる水温, 塩分測定並びに海水の化学分析。	海上保安庁水路部 測量船「昭洋」船上, 本州南方駿河湾沖及 び遠州灘海上。	6日
潮汐・潮流観測実習	ベルゲン, NC, OC各流速計による潮流観測, DCM-2流速計により各層潮流観測・水圧式水位計による潮汐観測	海上保安庁水路部 測量船「海洋」船上, 水島港及び付近	8日
合 計			14日

3. 測量・観測データ処理実習(海上保安庁水路部研修室)

科 目	内 容	日 数
海洋観測実習データ処理実習	海洋観測実習で得た観測データの解析及び計算	6日
潮汐・潮流観測実習データ処理実習	潮汐・潮流観測実習で得た観測データの解析及び計算	6日
合 計		12日

4. 研修見学機関

- (1) 海上保安庁水路部 : 技術関係各課の見学
- (2) 海洋科学技術センター : 海洋の利用・開発機器及び施設の見学
- (3) 吉野計器製作所 : 転倒式温度計作成工程の見学
- (4) 気象庁 : 広域地震監視システム, 気象データの収集及び解析, 天気図の自動図化等の見学
- (5) 株式会社協和商工 : 潮汐・潮流計器製造工程の見学
- (6) 株式会社鶴見精機 : 海洋観測機器製造工程の見学
- (7) 東海大学海洋科学博物館 : 海洋資料等の見学

TRAINING PROGRAMME FOR 1981 PHYSICAL OCEANOGRAPHIC SURVEY COURSE (Hydrographic Department, Maritime Safety Agency)				
Date	Hours	Subject	Place	Instructor
Nov. 9 (Mon.) } 13 (Fri.)		General orientation by JICA	TIC	
16 (Mon.)	0930-1530	Programme orientation and visit to HD	HD	
17 (Tue.) } 18 (Wed.)		Visit to Japan Marine Science and Technology Center (JAMSTEC)	Yokosuka	
19 (Thu.)	0930-1530	General aspect of physical oceanography	HD	Dr. Nitani
20 (Fri.) } 30 (Mon.)	0930 - 1530	Offshore physical oceanography	HD	Mr. Nishida
Dec. 1 (Tue.) } 2 (Wed.)	0930 - 1530	Wind waves	HD	Mr. Ura
4 (Fri.)		Visit to Yoshino Keiki Co.		
3 (Thu.) } 7 (Mon.)	0930 - 1530	Calibration of thermometrical instruments	HD	Mr. Ura
8 (Tue.) } 10 (Thu.)	0930 - 1530	General aspect of oceanographic instruments	HD	Mr. Ueno
11 (Fri.) } 15 (Tue.)	0930 - 1530	Chemistry of sea water	HD	Mr. Seto
16 (Wed.)		Visit to Japan Meteorological Agency		
17 (Thu.) } 18 (Fri.)	0930 - 1530	Practice on handling of instruments	HD	Mr. Ishii Mr. Seto
19 (Sat.) } 24 (Thu.)		Field training of oceanographic observation (aboard Survey Ship SHOYO)	Tokyo-Nagoya	Mr. Seto Mr. Nishida Mr. Ishii
25 (Fri.)		Preparation of report on oceanographic observation		
26 (Sat.) } 1982 Jan. 4 (Mon.)		Self-study on specific items		
5 (Tue.) } 12 (Tue.)	0930 - 1530	Data processing of oceanographic observation	HD	Mr. Seto Mr. Ishii
13 (Wed.) } 22 (Fri.)	0930 - 1530	Tides	HD	Mr. Kuwakino
25 (Mon.) } 29 (Fri.)	0930 - 1530	Tidal currents	HD	Mr. Nitta

Jan. 30 (Sat.) }		Field training of tidal and current observation (aboard Survey Ship KAIYO)	Mizushima	Mr. Takahashi Mr. Odamaki Mr. Kumagai
Feb. 6 (Sat.)				
8 (Mon.) }	0930	Data processing of tidal and current observation	HD	Mr. Takahashi Mr. Odamaki
9 (Tue.)	1530			
10 (Wed.)		Visit to Kyowa Shoko Co.		
12 (Fri.) }	0930	Data processing of tidal and current observation	HD	Mr. Takahashi Mr. Odamaki
17 (Wed.)	1530			
18 (Thu.) }		Visit to The Tsurumi-Seiki Co., Ltd. and Tokai University.	Yokohama Shimizu	
20 (Sat.)				
22 (Mon.) }	0930	General aspect of marine pollution research	HD	Mr. Nishida
24 (Wed.)	1530			
25 (Thu.) }	0930	Oceanographic data management	HD	Mr. Tatsuno
26 (Fri.)	1530			
Mar. 1 (Mon.)		Visit to Remote Sensing Technology Center of Japan		
2 (Tue.) }	0930	Special studies	HD	
4 (Thu.)	1530			
5 (Fri.) }		Observation and study tour		
9 (Tue.)				
10 (Wed.)		Preparation of report		
11 (Thu.)		Final meeting on training course Closing ceremony	HD	
		Closing ceremony	JICA	

Notes: (1) Lecture hours will normally be as follows:

Morning lecture: 09:30 - 11:45

Afternoon lecture: 13:15 - 15:30

(2) No lectures will in principle be given on Saturdays, Sundays and Japanese National Holidays. Field training, however, will be conducted on those days.

(3) The schedule may be slightly modified due to unavoidable circumstances.

運-17	コース名：港 湾（上級）	定員 8 名
------	--------------	-----------

受入期間： 56. 11. 16～56. 12. 20

関係省庁： 運輸省港湾局

受入機関：（財）国際臨海開発研究センター

国別応募状況：

国 名	応募数	受入数	国 名	応募数	受入数
インドネシア	3	2			
シンガポール	0	0			
スリランカ	1	1			
フィリピン	2	1			
アルゼンティン	1	0			
コスタリカ	1	0			
ブラジル	1	1			
メキシコ	3	1			
サウディアラビア	0	0			
シリア	0	0			
エジプト	3	2			
ナイジェリア	0	0			

受入担当：村上 博

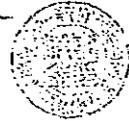
コーディネーター：大川 俊一

昭和57年1月14日

国際協力事業団

契約担当役理事 瀬川 治久 殿

財団法人 国際海産物研究センター
理事長 竹内 其 夫



業 務 報 告 書

「昭和56年度 港湾上流コース」業務に関する報告書を提出いたします。

1 研修成果及び今後の改善点

開発途上国において港湾の開発を行う場合に必要の人材は、単に港湾構造物の設計に長じた者ばかりではなく、むしろ工学や経済学の知識に基づき港湾開発について広い視野から投資規模、計画年次財源等に関し政策的な正しい判断ができる者である。

この主旨に基づき、本コースでは講師等に我が国の港湾行政の指導的立場にあるものを迎え、さらに、地方における港湾見学に際しても、市長をはじめ国の出先機関の局長あるいは地方自治体の局長と港湾開発のあり方について意見交換を行った。研修員の評価も良く、母国での港湾開発のあり方について得るものが多かつたとの感想を受けた。

個別研究については、各研修員の疑問点を解決する糸口として非常に有意義であつたと評価が高かつた。

今後の改善点として、本コースも5年目を向え講師カリキュラム等も充実して来たが、本コースの果す役割が増していることを自覚し今後も実りある研修になる様努力して行きたい。

JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION AGENCY (JICA)

P. O. BOX 216 MITSUI BLDG
2-1, NISHI-SHINJUKU, SHINJUKU-KU TOKYO
160 JAPAN

EVALUATION MEETING ON SENIOR COURSE IN PORTS AND HARBOURS ENGINEERING

held on December 18, 1981

You are kindly requested to express your frank opinions about the course for setting up further improvement of programmes.

Some items to be reviewed are as follows:

1. General Information
2. Orientation at the Japanese Embassy or JICA Office before you left your country.
3. Briefing at TIC
4. Organization of the Programmes (lectures, discussions, country report, observations, etc.)
5. Any subject to be modified or reconsidered
6. Necessity of Follow-ups
7. Living condition
8. Others

昭和56年度港湾上級コース・ファイナルレポート(抜粋)

JICA・研一 村上

1. 長尾, 今井両教授ならびに竹内理事長(OCDI)の講義はもっと長くして欲しい。(講義技術の良さもさることながら, 三者が共通して港湾開発に関する講義であり, 研修員の最も興味のある対象の一つであると思料される。(村上))
2. 港の見学の際, 見学する施設が重複しないよう希望する。
(2~3港の見学で十分。 (研修員))
また, その分講義時間(日数)を長くして欲しい。
3. 研修員に共通な問題点についての討議時間をより長く。
(テーマをでき得る限り限定することも一方法。 (村上))
4. 帰国後も最新港湾技術の資料(雑誌等), またJICAの事業に関する最新情報を与えて欲しい。
5. 視聴覚機材の活用を提案する。

以上

昭和56年度第5回港務上級コース・プログラム（案）

昭和56年11月16日～12月20日

月日	曜日	時 間	日 程	講 師 等	職 名	場 所
11 16	月		来 日 初 周			
17	火					
18	水					
19	木	10:00～12:00	プログラム・オリエンテーション、港務における海外技術協力	西 田 幸 男	運輸省港務局国際協力室長	F I C
		13:30～16:00	日本の港務事情（現況、港務の仕組、特徴）	藤 井 宏 知	運輸省港務局建設課長	、
20	金	10:00～16:00	港務開発論	竹 内 良 夫	(財)国際港湾研究センター理事長	、
21	④		フリ－			
22	⑤		フリ－			
23	⑥		フリ－			
24	火		運輸省港務技術研究所見学及び幹部との意見交換	久 田 安 夫	運輸省港務技術研究所長	P-H・R・I
			横浜港見学及び幹部との意見交換	石 渡 友 夫	運輸省港務技術研究所企画室長	
25	水			松 本 輝 寿	運輸省第二港務建設局長	横浜港
				小 林 弘 毅	横浜市港務局長	
26	木	10:00～16:00	個別研究 I			
27	金	10:00～16:00				
28	④		フリ－			
29	⑤		フリ－			
30	月	10:00～16:00	コンテナ・ターミナルの計画と建設	荒 木 一 郎	京浜外貿埠頭公団施設部長	F I C

月日	曜	時 間	日 程	講 師 等	職 名	場 所
12 1	火		大井コンテナ・ターミナルの見学及び幹部との意見交換	山 添 鉄 一	京浜外資埠頭公園理事長	
2	水	10:00～16:00	港湾開発の総合評価と代替案選択	長 尾 義 三	京都大学教授	
3	木		港湾技術開発の動向	坂 井 順 行	運輸省港湾局技術開発管	
4	金		鹿島港見学	岸 正 平	第二港湾建設局鹿島港工事事務所長	
5	⊕		鹿島→東京			
6	⊕		フリ-			
7	月	10:00～16:00	国土開発における港湾開発の役割	今 野 修 平	福井医科大学教授	TIC
8	火	10:00～16:00	カントリレーレポート発表会		運輸省港湾局	運輸省会議室
9	水	10:00～16:00	カントリレーレポート発表会		東京都港湾局	"
10	木		個別研究Ⅱ		(財)運輸技術研究所センター	"
11	金		東京→清水、清水港見学及び幹部との意見交換	祁 名 嘉 男	清水市長	
12	⊕		清水→神戸			
13	⊕		フリ-			
14	月		神戸港見学及び幹部との意見交換	工 藤 和 男	運輸省第三港湾建設局長	
15	火		神戸→広島、広島港見学	長 野 正 孝	第三港湾建設局広島港工事事務所長	
16	水		広島→東京			
17	木	10:00～12:00	各国の港湾整備の課題について	吉 村 貞 孝	運輸省港湾局長	運輸省港湾局長室
18	金	13:00 16:00 10:00～12:00	技術問題討論会 エバリーユエーション	西 田 幸 男	運輸省港湾局国際協力室長	TIC
		12:00～13:30	閉 講 式	川 島 毅	補佐官	
19	⊕		帰 国 準備	足 立 一 美	係 長	
20	⊕		帰 国			

運-18	コース名：船舶技術	定員 15名
------	-----------	-----------

受入期間： 57. 1. 7～57. 12. 24

関係省庁： 運輸省船舶局

受入機関： 海外造船協力センター

国別応募状況：

国名	応募数	受入数	国名	応募数	受入数
インド	2	1	ユーゴスラビア	1	0
インドネシア	1	0	エジプト	4	1
シンガポール	2	2	タンザニア	1	1
スリランカ	1	1	チュニジア	0	0
タイ	2	1			
パキスタン	1	1			
バングラディシュ	2	1			
ビルマ	2	2			
フィリピン	1	1			
マレーシア	0	0			
アルゼンチン	2	1			
チリ	3	1			
ブラジル	1	1			
ペルー	0	0			
メキシコ	3	1			

受入担当： 石田 幸男

コーディネーター： 佐藤 千代

※ 昭和56年度(継続)船舶技術コースは、現在実施中であり、本報告書には昭和55年度(継)コースの中間及び最終の報告を掲載した。

昭和55年度(継)船舶技術コースに係る
中間エバリュエーションミーティング

日 時 58年8月19日(水) 10時00分～12時00分
場 所 海外造船協力センター
出席者 海外造船協力センター (杉田・大島・田中・橋崎)
研修員 16名 JICA(石田・佐藤)

1. 来日について

- 受入回答をもらった時期が出発日の1週間前であったので、今後はもっと早くしていただきたい。
JICA: 出発1カ月前に通知している。相手国の諸事情で遅れたのではないか。
- 金曜日に来日し、土・日とアローワンスなしで過ごした。今後なんとかしてほしい。

2. General Orientation について

- すべて完べきであった。期間も申し分ない。

3. 日本語講座について(2カ月)

- 期間は十分であった。講師も非常によかった。
- ある程度知識のある人が1日中単純な内容の会話を勉強するのは、少し物足りない。したがって半日づつに分け、残りの半分は造船の講義というようにしたら効果的ではないか。
- 会話練習の為、フォーマルな日本人との会合をもつたらどうか。

4. 座学について

- 研修員の興味の分野がそれぞれちがうので、一概に評価できない。共通した意見としては運輸省による船舶行政は20時間も講義不要、せいぜい半日でいいのではないか。
- 講義時間をへらし、実習時間を多くしてほしい。
- 1日の講義時間6Hは多すぎる。
- 一般的造船技術をはば広く研修するのではなく、年毎にポイント課目をきめ、例えば、welding ならwelding の専門の研修生を受け入れ集中的に実施すれば、より効果のある研修が可能である。
- 又は、グループを3つくらいに分け(ポイント課目別もしくは専門別)実施したらどうか。

5. 研修旅行について

- 1つの見学時間が約1.5H～2Hでは不十分である。少なくとも半日は必要、もちろん見学先のスケールによる。
- 見学先の案内者が1人では、我々16人を相手にするのだから不十分である。
- 1回くらいは、日本式の旅館へ宿泊してみたい。
- 名古屋のチサンホテルはよくなかった(せまさすぎる)。

14期生 Evaluation Meeting(中間)記録
(研修員よりの意見)

1981年8月19日(水)
10:00~12:00 OSCC会議室

1. 来日時

- 成田に来るまでのトランジットにトラブルがあった。
- 来日前にJICAの研修員というバッジかワッペンをつければよい。
- 受入れ通知をもっと早くもらいたい。(現在、本人には一週間前に到着し、ビザ手続・出発準備が忙しい。)

※JICAは1ヶ月前に知らせている。

- Hotel 到着時(土・日)は、JICAからInformationもAllowanceも与えられないので困った。

2. TICでのオリエンテーション

- 大変良かった。
- 日本の習慣についての話は大変参考になった。

3. 日本語講座

- 2ヶ月で十分だが、毎日、一日中ではきつい。
初期の造船工学の授業とミックスできないか。あるいは、MOTなどの特別講義と。
- 平がな、片カナも教えるべし。
- 日常会話のinformal styleな話し方も教えてくれ。

4. 最も興味があった科目(研修員によって異なる)

- Outfitting Design
- Ship Calculation, Basic Design
- Ship Repair
- Hull Construction
- Management. etc.

5. もっと時間数を多くすればよい科目

Ship Repair (Machinery, Engine Roomについて)
Outfitting Design
Welding Process
Basic Design, Mold Loft
Hull Construction

6. もっと時間数を少くしてよい科目

- MOTの特別講義
- Ships in general - 研修員は大卒で3年以上の経験者なのでこれは必要ない。

7. 座学全般について

- 1日の講義時間が長すぎる。
- 20ヶ月コースでやったことを1年コースで同じ量を教えるのは無理ではないか?

- Lecture を少く, Practice を多く。
- 座学期間中に, 造船所実習を合わせて出来ないか?
- Design, Construction, Repair といった専門別に 1 年ごとに, 交互にコースを実施すればよい。
(3 年にわたって), そうすれば同じ予算で, 研修員にも帰国してからもっと役に立つのではないか?
- 造船業界の新しい技術を映画を使って, 教えてほしい。
- OSCC の Text は古いのではないか?
- Maintenance of Ship も一つの科目として教えてほしい。(船会社からの研修員のため)
- Marine Electricity はもっと実用的な講義に。

8. 見学について

- 造船所での見学時間が短い。
Scale, Size によって, 多くとったり, 少くしたりするように。
- 工場の Speciality に的をしぼって見るとよい。
- OSCC よりバスで行くとよい。(場所によって電車の方が早い)
- Lecture に合った工場を見るとよい。
- 関連工業の見学をもっと含んでほしい。
- 自動車工場を見学したい。

9. その他

- TIC で行っている行事, バス旅行(旅行社が企画しているもので TIC 主催ではないとの事)に参加できるよう考慮してくれ。
- 研修生あて電話の取扱い。
外部からの研修生あて電話は 22:30 までにする事とフロントから指示されているが, もう少し時間をおそくできないか?



海造協(横)第 221 号
昭和 57 年 1 月 22 日

国際協力事業団

理事 瀬川 治久 殿

財団法人 海造協(横)センター
会長



研修業務実施報告書の提出について

拝啓 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。かねてより、ご高配に接し、厚くお礼申し上げます。

さて、昭和56年4月1日付けをもって契約いたしました昭和55年度集団研修船舶技術コース Mr. Djelloul Stambouli 他 15 名に対する研修実施契約に基づく受託業務は完了いたしましたので、契約条項第 9 条に基づいて下記のとおり報告いたします。

敬 具

記

1. 研修実施概要、研修結果の評価、所見、改善の方向および研修成果について

別 紙 1. のとおり

2. 研修経費精算報告書

別 紙 2. のとおり (略)

1. 研修実施概要

(1) 研修員名(国籍)

Mr. Djelloul Stambouli (Algeria)
Mr. A. S. M. Rezaul Quddus (Bangladesh)
Mr. L. Alberto Larenas (Chile)
Mr. Nader Abbass Mohamed Fors (Egypt)
Mr. Semiti Vuniloaloa Cama (Fiji)
Mr. Sree Kumar S. (India)
Mr. Wahjudi (Indonesia)
Mr. Ghulan Asghar Shaikh (Pakistan)
Mr. Jaime Agustin Sobero Taira (Peru)
Mr. Warner C. Camba (Philippines)
Mr. Edmundo V. Toleta (Philippines)
Mr. Chow Kar Wah (Singapore)
Mr. Phua Hwan Khoon (Singapore)
Mr. Rupasinghe Abayagunawarena (Sri Lanka)
Mr. Ben Amor Mehdi (Tunisia)
Mr. Seden Mehmet Selcuk (Turkey)

計 16 名

(2) 研修科目

昭和55年度集団研修船舶技術コース

(3) 研修実施期間

昭和56年4月1日～昭和56年12月24日

(4) 研修実施機関

財団法人 海外造船協力センター

(5) 主たる研修場所

① 横浜市港南区日野町467番1

財団法人 海外造船協力センター

- ② 清水市三保 387 - 1
日本鋼管(株) 清水製作所
- ③ 清水市三保 3797
(株)三保造船所
- ④ 江東区新研 2 - 3 - 43
石川島造船化工機株式会社

(6) 実施した研修内容等

- ① 昭和56年 4月1日から同年 8月20日まで

◎ 講義した科目とその時間数

a. Ship calculation, Applied ship dynamics	14 hrs.
b. Basic design	37 hrs.
c. Hull design	37 hrs.
d. Drawing, Molding plan	18 hrs.
e. Hull construction process	37 hrs.
f. Welding process	37 hrs.
g. Outfitting design	37 hrs.
h. Outfitting process	37 hrs.
i. Ship repair	18 hrs.
j. Outline of marine engine	27 hrs.
k. Outline of marine electricity	15 hrs.
l. Production control, Management of Shipyard	27 hrs.
m. Fishing boat	24 hrs.
n. Work boat	15 hrs.
o. Harbour and Shipping	18 hrs.
p. Maritime policy, Law and regulations, International cooperation	18 hrs.
q. Japanese Language	40 hrs.
Total	<u>456 hrs.</u>

◎ 交付したテキストブック

- 1) NK Rule 1980.
- 2) NK Rule for Small ships.
- 3) 船体各部名称図
- 4) Marine JIS 1980 Engines and Valves.

- 5) - do - Hull Fittings.
- 6) - do - Electric appliances & Navigation Instruments.
- 7) Basic design.
- 8) Ship outfitting design.
- 9) Hull construction process.
- 10) 造船統計要覧 1981.
- 11) JSQS Hull part.
- 12) Outfitting process Part I.
- 13) - do - Part II.
- 14) Practical detail of piping hull part.
- 15) Electrical outfitting.
- 16) List of drawing for approval.
- 17) JSQS Outfitting process.
- 18) Guidelines on Surveys under 1978 SOLAS protocol.
- 19) Guide to Ship-machinery manufacturers & products.
- 20) Marine engines.
- 21) Marine engines supplement.
- 22) New shipbuilding techniques 1975.
- 23) Fuji Diesel engine.
- 24) Ship repair.
- 25) Ship repair supplemental textbook.
- 26) Shipyard management & Production control.
- 27) Shipyard management & Production control supplement.
- 28) Outline of electrical equipment in ships.
- 29) Fishing boats, First Part.
- 30) Fishing boats, Second Part.
- 31) -do - , Third Part.
- 32) Painting of ship.
- 33) Contemporary ship handling tugs.
- 34) Marine inert gas system standard specification for Mitsubishi Heavy Industries Ltd.
- 35) The Present situation of the shipbuilding industry and the administration on the industry in Japan.
- 36) Lloyd's statistics etc.

- 37) Government of Japan.
- 38) Outline of the maritime laws.
- 39) Ship's safety law.
- 40) Agreement on technical barriers to trade.
- 41) The industrial standardization.
- 42) - do - , supplement.
- 43) Ship inspection system.
- 44) Protocol of 1978 relating to the international convention for the prevention of pollution from ships 1973.
- 45) On the development situation in Japan of preventive machinery and equipment for oil pollution corresponding to the effectuation of the international convention for the prevention of pollution from ships 1973.
- 46) Harbour and Shipping.
- 47) IMCO and international regulations relating to ships.
- 48) Tonnage regulations and measurement of tonnage.
- 49) Work vessels of Japan 1978.
- 50) Outline of the international convention for the prevention of pollution from ships 1973.

Total 50 copies.

◎ 実施した見学先機関等

- (株)新潟鉄工所 三崎工場 (在三浦市)
- 日本鋼管 (株) 京浜製鉄所 (在川崎市)
- 大洋電機 (株) 岐阜工場 (在岐阜県笠松市)
- 日本鋼管 (株) 津製作所 (在津市)
- (株) 西井造船所 (在伊勢市)
- かもめプロペラ (株) (在横浜市戸塚区)
- 運輸省船舶技術研究所 (在三鷹市)
- 川崎重工業 (株) 神戸造船所 (在神戸市)
- (株) 石原造船所 (在高砂市)
- 浜中製鎖工業 (株) (在姫路市)
- ヤンマーディーゼル (株) 尼崎工場 (在尼崎市)
- (財) 日本造船振興財団海洋環境研究所 (在筑波)
- (株) 植田鉄工所 (在高松市)

- 波止浜造船(株)多度津事業所 (在多度津市)
- (株)来島どっく 大西工場 (在愛媛県大西町)
- (株)新興金属工業所 (在広島市)
- 因島鉄工業団地協同組合 (在因島市)
- 日立造船(株)広島工場因島 (在因島市)
- 常石造船(株) (在広島県沼隈町)

計 19 カ所

◎ 日本語の補講

昭和56年4月6日から同年7月30日まで毎週2日(月、木曜日)午後6時から8時まで合計56時間、在横浜市米国々務省日本語研修所教官(今野幸男)に依頼して日本語の補講を実施した。この補講の全期間中無欠席の8名に対しては、当センターより証明書を交付した。

◎ 健康管理

工場実習実施前(8月18日)研修員全員の健康診断を行った。

- イ 内 診
- ロ 血圧測定
- ハ 尿の検査
- ニ レントゲン胸部透視診断

◎ レクリエーション

ピンポン大会を開催、優勝者以外にも参加賞を与えた。

② 昭和56年8月21日から同年12月10日まで

◎ 工場実習

研修員16名を8名、4名、4名の3班に分けて前記3造船所にて工場実習を実施した。班別造船所研修員氏名は下記のとおりである。

A 日本鋼管(株)清水製作所

- 1) Mr. Djelloul Stambouli (Algeria)
- 2) Mr. L. Alberto Larenas (Chile)
- 3) Mr. Nader Abbass Mohamed Fors (Egypt)
- 4) Mr. Sree Kumar S. (India)
- 5) Mr. Ghulam Asghar Shaikh (Pakistan)
- 6) Mr. Warner C. Camba (Philippines)
- 7) Mr. Edmundo V. Tolete (Philippines)
- 8) Mr. Chow Kar Wah (Singapore)

B (株)三保造船所

- 1) Mr. A. S. M. Rezaul Quddus (Bangladesh)
- 2) Mr. Jaime Agustin Sobero Taira (Peru)
- 3) Mr. Ben Amor Mehdi (Tunisia)
- 4) Mr. Sedun Mehmet Seleuk (Turkey)

C 石川島造船化工機(株)

- 1) Mr. Phua Hwan Khoon (Singapore)
- 2) Mr. Rupasinghe Abayagunardena (Sri Lanka)
- 3) Mr. Semiti Vuniloaloa Gama (Fiji)
- 4) Mr. Wahjudi (Indonesia)

この工場実習の概要については、別添の各造船所からの報告書のとおりである。

③ 昭和56年12月11日から24日まで

- ◎ レポートの作成、資料等の整理、帰国準備。
- ◎ エバリュエーション、ミーティング開催。
- ◎ 12月21日(月) JICA主催にて閉講式が挙行された。
(写真参照)

◎ 研修員は、12月24日までに全員が帰国した。

2. 研修結果の評価等

① OSCOでの講義に対する要望、意見等
(エバリュエーション、ミイテングによる)

◎ 最も興味があった科目

- 1) Outfitting design.
- 2) Ship calculation and basic design.
- 3) Ship repair.
- 4) Hull construction.
- 5) Management etc.

◎ もっと時間数を増せばよい科目

- 1) Ship repair (Machinery in engine room).
- 2) Outfitting design.
- 3) Welding process.
- 4) Basic design and Mold loft.
- 5) Hull construction.

◎ もっと時間数を減らしてよい科目

- 1) Laws and regulations.
- 2) International cooperation.
- 3) Ships in general.

◎ 座学全般について

- 1) 20カ月コースでやった科目を1年コースで同じ量を教えるのは無理ではないか。
- 2) 1日の講義時間が長すぎる。(前回より1時間延長)
- 3) 講義を少く、実習を多くできないか。
- 4) 座学期間中に、造船所で実習はできないか。
- 5) 保船についても1つの科目として教えて欲しい。
(船会社からの研修員より)
- 6) 舶用電気はもっと実用的講義をしてもらいたい。

◎ 見学について

- 1) 造船所での見学時間が短い。その規模に応じて、多くとったり、少くしたりした方がよい。
- 2) その工場の特徴に的をしぼって見学するとよい。
- 3) 講義科目に合った工場の現場が見学できるとよい。
- 4) 関連工業の工場をもっと多くした方がよい。
- 5) 自動車工場を見学したい。

◎ 工場実習について

- 1) 大変よかった。..... 8人/16人中
- 2) 期間が長いとよい。..... 8人
- 3) 日本語の必要性を痛感した。(技術用語)...7人
- 4) OSCCの講義が応用できた。.....3人
- 5) ノウハウをもう少しオープンにして欲しい..3人
- 6) 帰国後直ちに応用できる。..... 3人
- 7) 日本語の資料は困った。..... 14人

◎ JICAおよびOSCCに対する要望、意見等

- 1) 家族をつれてこられるよう配慮してほしい。
- 2) 日本語は2カ月で十分だが、毎日1日中はつらい。初期の造船工学をまぜてほしい。ひらがな、片かなも教えてほしい。
- 3) 実習時における日本語の重要性を当初に説明してほしい。又日本語の技術用語も教えてほしい。
- 4) 実習に出る前に予め研修員の希望する科目を聞いて、OSCCから造船所へ連絡しておけば、教材も英語で準備できると思う。
- 5) 実習先造船所は、規模の大小によつてのグループ分けでなく、研修員の希望する科目別でグループ分けした方がよい。そうすれば受入側でも準備ができ、途中でのスケジュール変更もなくなるだろう。

◎ 講義および工場実習に対する研修員の自己評価

最終報告書より摘出集計した別添一覧表のとおりであるが、この評価は研修員の基礎知識、経験等に基づいて判断されたものである。したがって個人差はあるものの総体的には相当理解され、成果は挙げたと認められる。

3. 所 見

1) 日本語について

本コースに限らず、日本語の必要性については、夙に痛感しているため各コースで研修を実習しているところ、本コースの如く長期に亘り、然も工場実習を伴うコースでは尚更である。

故に当方としては、2カ月の日本語研修後、引続き前述のとおり毎週2日18:00～20:00合計56時間補講を実施し、帰国研修員の意見に沿うよう努力している。

又、日本語の技術用語希望の意見があるが、これについては日本語教師では困難で技術者によらざるを得ないが、実行上にはむずかしい点がある。

2) 座学講義について

従来20カ月の研修期間を本期(55年度)から12カ月に短縮されたが、研修科目については変更せず、講義時間を1日当たり1時間延長して実施したので、実質的には従来と殆ど変りはない。

本期研修員16名中、造船工学既習者5名、他11名は機械および電気工学関係であったが、前者後者とも已に母国で学んだ科目については興味が薄いように見受けられた。このようなことは毎期同様であるが、集団研修である以上如何ともなしがたいことである。

3) 工場実習について

従来は、大規模造船所2カ所で実施したが、従前より中小

型規模の造船所での実習希望があったので、今期は前述の如く中型造船所でも実施した。

当初心配していた中型造船所における実習は、受入れ造船所の努力と宿舍の完備等もあって、予想以上の成果が挙げたと思われるが、小中型造船所と雖も、わが国ではコンピューターの活用或は下請業者を使う等、研修員の母国造船所での工作方法とは格段の相違があり、（ブラジル、シンガポール等は別）直ちに、この日本のシステムを導入することは難しいと思われるが、日本での研修成果の活用を期待したい。

又特に小中型造船所においては、最少の人員をもって最大の生産を挙げようとする企業の事情から研修員を指導する余裕も少なく、資料等のこともあり、小中型造船所での実習は受入れに問題が少くないことを痛感した。

4. 改善の方向

- 1) 研修員からの意見、要望等はこれを尊重して、できるものから逐次実施することとし、早速56年度（15期）より日本語研修中、2カ月目から午后の時間を造船工学の講義を行うこととした。
- 2) 学科の講義時間を短く、実習期間を長くという意見は、造船工学既習者の意見であるが、しからざる者も多いので、研修期間1カ年とすれば現在のスケジュールで改善の要はないと思われる。
- 3) 現在の集団研修は、1国1名を原則として将来高級幹部となるべき人物を対象に考えているが、同時に現場の中堅指導者の養成もこれに劣らざる重要な問題であると考えられる。この研修については、同じ位のレベルの規模、工作方法等の国から、その国々から近い一定の国に下級技術者を集めて教育する所謂第三国研修を検討しては如何かと考える。

4) 視聴覚教育システムによる講義内容の理解を一層容易にするため、先年度より(財)日本船舶振興会よりの補助金を得て、フィルム、スライド、ビデオテープ、構造模型および写真パネル等の教材の整備に鋭意努めつつある。

5. 研修の成果

従来の研修期間20カ月を今期(14期)より12カ月に短縮されたので、前述のとおり、講義時間について若干整理したが、科目は従来とおとし、実質的内容は従前と変わりなく、工場実習については期間は短縮したが、大型造船所グループと中型造船所グループとに分けて、その改善を計る等、研修の合理化を推進したので、所期の成果は得られたものと思料される。

6. 添付物

- 1) 閉講式場景写真
- 2) 研修員の研修自己評価集計表
- 3) 工場実習先よりの報告書 3部

(了)

14期生 自己評価一覧表 (Final Report より)

Country Items	1. Algeria		2. Bangladesh		3. Chile		4. Egypt		5. Fiji		6. India		7. Indonesia		8. Pakistan		9. Peru		10. Phillipines		11. Phillipines		12. Singapore		13. Singapore		14. Sri Lanka		15. Tunisia		16. Turkey		
	Name	Stambouli	Quddus	Latemas	Nader	Semiti	Kumar	Mahjudi	Alghar	Sabero	Camba	Tolete	Chow	Phua	Abaya	Mchdi	Seden																
Generation orientation	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A		
Japanese language																																	
Intro to shipbuilding																																	
Practical training	C	A	A	D	B	A	A	B	A	B	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	
Theoretical lecture																																	
1. Ships in general	B	C	B	B	B	B	C	B	C	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	
2. Ship calculation & Applied ship dynamics	A	B	B	B	B	A	C	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
3. Basic design	B	B	B	B	B	A	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
4. Hull design	B	B	B	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
5. Drawing, molding plan	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
6. Hull construction process		A	B	B	B	A	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
7. Welding process	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
8. Outfitting design	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
9. process	A	B	B	B	B	C	C	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
10. Ship repair	A	B	A	A	B	A	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
11. Marine engine	A	B	B	C	B	C	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
12. " electrical-city	C	B	B	B	B	C	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
13. Production control & shipyard management	C	A	B	B	B	A	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
14. Fishing boat	C	A	B	B	C	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
15. Work boat	C	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
16. Harbour & shipping	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
17. Law & regulations	C	B	B	B	C	B	C	B	B	C	B	C	B	B	C	B	C	B	C	B	C	B	C	B	C	B	C	B	C	B	C	B	C
18. International cooperation	B			B	C	B		B		C	B		B																				

(注) 1. 造船所における Practical Training については内容を更に細分し、その各々に評価を下した者が 2, 3 いるが、この様な場合には多数を占める評価をもって代表させ、本表に記入した。
 2. 教科番号 2; 13; の様に内容が 2 つに区分されるものについて、その各々に評価を付している場合は、本表へもその通りに記入した。

COPY

昭和57年1月

財団法人 海外造船協力センター

会長 水品 政雄 殿

日本钢管株式会社 清水製作所

取締役 大場 和夫
所 長

第14期（55年度）海外研修生

集団研修船舶技術実習コース

造船所研修報告書

記

1. 研修の概要
2. 研修の成果
3. 研修における問題点とその改善方向

1. 研修の概要

(1) 期 間

昭和56年8月21日～昭和56年12月10日

(2) 研修場所

静岡県清水市三保387番地の1
日本鋼管株式会社 清水製作所

(3) 研修生氏名

1. Mr. Djelloul Stambouli (Algeria)
2. Mr. L. Albrto Larenas (Chile)
3. Mr. Nader Abbass Mohamed Fore (Egypt)
4. Mr. Sree Kumar S. (India)
5. Mr. Ghulam Asghar Shaikh (Pakistan)
6. Mr. Warner C. Camba (Philippines)
7. Mr. Edmundo V. Tolete (Philippines)
8. Mr. Chow Kar Wah (Singapore)

計8名

(4) 工場研修取りまとめ窓口

海外研修生受入チーム チーム主査 中野昭彦(係長格)

(5) 研修内容

別添研修スケジュール参照

- A. オリエンテーション(8月21日～8月25日)
 - a. 所長および所幹部への紹介
 - b. 所の概要説明
 - c. 研修日程および研修内容の説明と質疑応答
 - d. 所内日常生活および宿舎諸事項の説明、案内
 - e. 作業服、安全保護具等の貸与および安全教育
 - f. 造船部、修繕船部、重工部の各工場見学
- B. 集団研修(8月26日～9月4日)

新造船の設計、船殻、機装および品質保証の各部門において、各々の所掌業務、組織、機能、技術等について現場見学を交えながら一般講義を行なった。

C. 個別研修（9月7日～12月9日）

研修生個々の要望を全面的に取り入れて、個人別カリキュラムを作成し、現場実習を交えて研修を行なった。途中で研修生の要望により研修内容の変更を行なった。

D. パーティ

下記2回、所内関係者とともに懇談会食した。

a. 歓迎会（8月21日） 総勢20名

b. 送別会（12月10日） 総勢43名

E. 研修旅行および工場見学

東北造船㈱・山下造船㈱（9月30日～10月2日）

ヤマハ発動機㈱（11月7日）

F. 研修時間

所従業員と同様の8：00～17：00（休憩12：00～13：00）とした。

G. 休日

所従業員と同様の所定就業カレンダーどおりとした。

(6) その他

A. 貸与・支給品

a. 貸与品 安全帽、安全帯、耳栓

b. 支給品 作業服（夏・冬各2着）、雨ガッパ、安全靴、ベルト、タオル、軍手、軍足

B. 昼食

研修生の希望により、来客用洋食を手配した。

C. 控室

監督官・検査官用控室を使用した。

D. 宿舎

羽宮潜水サービス㈱経営 堀池荘

2. 研修の成果

(1) 総括

○当所として海外研修生受け入れチームを設置し、6月中旬より準備活動に入り、下記の内容を検討した。

a. 実習カリキュラムの編成

b. 実習テキストの編纂

c. 宿泊・食事等の実習・生活環境

d. 実習外時間のレクレーション(余暇の過ごし方)

○各研修生で知識レベル、専門分野、興味のある分野が異なるため、極力集団研修を短縮し、個別研修の時間を長くとした。個人別のカリキュラムを作成の上、実習を行なった。

このようにフレキシブルなスケジュールで研修を行なったことにより、各研修生とも研修内容についてはある程度満足したと考える。

また、研修生のうち2名については、本人のつよい希望により1週間および2週間の日程で、当社鶴見製作所において研修を行なった。

(2) 集団研修

研修生からの強い要望で、集団研修の期間を短縮し、当所における設計から船設、積装、品質保証までの一連の業務を説明することにとどめたが、OSCCにおいて学んだ講義の内容とラップする部分が多かったためか、全般的に意欲が低く低調であった。

当所としては、OSCCにおける講義の内容について実際の製造現場がどのように動いているかということ把握するため、個別研修を円滑に実施していくための導入教育の目的で実施したのであるが、この趣旨はあまり理解されなかつたようである。

(3) 個別研修

研修生の要望により作成した個人別スケジュールに基づき、各受け入れ部署において綿密な日割スケジュールを立てて研修を行なったことにより、大きな成果を収めることができたと考える。

当初は、2～3名ずつまとまつて研修が実施できればと期待していたのであるが、結果的には各人各様のコースとなり、研修方法も大部分はマン・ツー・マン式となつた。

但し、修繕船部門の研修については、研修生の希望する工事を行なう船がタイムリーに入るとは限らず、また、当所修繕船部の対象顧客が日本船がほとんどであるため英文の資料が少なく、研修成果は他に比べて低かつた。

(4) 研修旅行および工場見学

東北造船・山下造船およびヤマハボートの工場見学を行ない、当所の実習では見ることのできない内容について研修を行なった。

特にヤマハボートにおいては、FRPの製造方法について研修を行ない、各研修生とも大きな興味を示していた。

(5) その他

A. 病 気

中耳炎1名、痔1名の発生をみたが、いずれも通院治療した。

また、軽度の腹痛、風邪、歯痛について若干名の発生があつたが、いずれも通院投薬で治療した。

懸念したホームシック等精神不安定な状態の発生は幸いなかつたが、総じて風邪、腹痛、歯痛等の病状の訴え方がオーバー気味であり、受け入れスタッフを心配させることが多かつたが、中耳炎を発病した1名については、

本人が我慢して症状を訴えず、研修生の健康管理については細かい注意を払わざるを得ないものと判断した。

B. レクリエーションおよび余暇の過ごし方

バスハイク（箱根）、ソフトボール大会、海上保安庁巡視船「おおつ」乗船、日本海事懇話会 大石私邸訪問等の他、「海外研修生ボランティア」を所内報等を通じて従業員から募り、自宅へ招待してもらいなどを行なった。

また、各研修生とも研修を通じて友人も多くでき、自宅を訪問したり、休日にテニスやドライブに同行する人もあり、総じて有意義な余暇の過ごし方をしてもらったと考える。

C. 宿舎・食事

宗教戒律により豚肉をとれない人2名の他、個人の好みで魚貝類を一切食べない人、和食の好きな人、洋食の好きな人、一人前では満足しない人など様々であり、当初検討したメニューを逐次改善して対応したが、それでも堀池荘の食事をキャンセルして外に食べに行く人があり、堀池荘職員の苦勞は多かつた。

3. 研修における問題点とその改善方向

(1) 技術力・知識レベル

学歴および実務経験の相違により、OSCCにおける講義による基礎知識の理解度に差が見られ、研修生のレベルは異なっていたが、それぞれの専門職種に限つては、かなり高い技術力を備えていることがうかがわれた。

また、全く実務経験のない職種を個別研修の中で選択した研修生もあつたが、本人が自発的に選んだものについては研修意欲も高く、習熟は早かつた。

語学力に関しては、英語については十分な力を持つており問題はなかつたが、日本語を自発的に話そうとしない研

修生があり、円滑なコミュニケーションを阻害する一因となつた。

(2) 研修内容

研修内容としては、各職種ともプランニングおよびマネジメントに主体をおいて欲しいとの要望があり、これに応じて技能実務は補足的に行なうこととし、研修を実施したが、講義方式が主体とならざるを得ず、限界があつた。

今後の研修方法としては、モデル船について研修生自身がプランニングを行なう等の実地体験が必要であると考え。

また、修繕船部門における研修については、当所修繕船部の規模が小さく、加えて外国船の修理がほとんど無いため、研修途中において不満が出たが、研修開始前に研修先の実態をよく打ち合わせしておく必要があつたと考える。

(3) 資料

当初、造船に関する全般的な資料を準備すべく作業を開始したが、OSCOにおける講義で使用された概論的なテキストがあつたので、全般的資料の作成を中止し、当所の特色ある方式について項目別に資料を作成して配布した。しかしながら、量的、質的に充分といえない状態であり、当所の仕事の流れ全般を網羅する英文テキストの作成の必要性を痛感した。

また、KQS（鋼管品質標準）、HS（船殻標準）等の社外秘扱いの書類については、全面的な提供は断わつたが、これに対する研修生の反応は予想以上に大きく、研修自体に悪影響を及ぼした。この点については研修生に対し繰り返し説明を行なつたが理解を得られず、一時は不信感をいだかれたこともあつた。OSCOにおいて事前に研修生へ事情説明を行なつていただければと考える。

(4) 研修受け入れ体制

当所も同業他社と同様に、少数精鋭で業務運営が行なわれており、今回の研修にあつては、研修スタッフの業務について可能な限りの配慮を行なつたにもかかわらず、日常業務の多忙から円滑な対応ができなかつたケースも発生し、研修生に迷惑をかけた点も少なくない。

しかしながら、研修生側においてもかかる造船所の実状を理解され、一部の研修生に見られたように、研修途中において何度もスケジュールの変更を要求するのではなく、事前に十分な研修内容、スケジュールの検討・打ち合わせを行なう必要があつたと考える。

また、各受け入れ部署において、指導員の語学力の不足によるコミュニケーションの問題が発生し、研修生に迷惑をかけたが、語学力の向上は今後の当所の課題である。

終わりにあたり、今回の研修が一応の成果をもつて無事終了するとともに、当所にとつても国際化の気運が高まる環境の中にあつて大いに勉強する点が多く、実りあるものであつたことについて、数々のご配慮をいただいた国際協力事業団ならびに海外造船協力センターの皆様方へ厚く御礼申し上げます次第であります。

以 上

COPY

昭和56年12月

財団法人 海外造船協力センター
会長 水品政雄 殿

株式会社 三保造船所
総務部長 鈴木保太郎

昭和55年度実施集団研修船舶技術実習コース
造船所研修報告書

記

1. 研修の概要
2. 研修の成果
3. 研修における問題点とその改善方向

1. 研修の概要

(1) 期 間

昭和56年8月21日から昭和56年12月10日まで

(2) 研修場所

静岡県清水市三保 3797 番地

株式会社 三保造船所

(3) 研修者氏名

Mr. A. S. M. Rezaul Quddus (Bangladesh)

Mr. Jaime Agustin Sobero Taira (Peru)

Mr. Ben Amor Mehdi (Tunisia)

Mr. Seden Mehmet Selcuk (Turkey)

(4) 研修内容

別添研修スケジュール参照

ア. オリエンテーション(8月21日～8月26日)

会社幹部面談、安全教育、外人登録

各課におけるスケジュール細部打合せ

イ. 集団研修(8月27日～11月14日)

船殻課(現図・溶接及び切断・内作・組立・船台)

機装課(機関・電気)

船装課(鉄葺装・木葺装・塗装)

上記各課において実作業を中心に各課の業務、組織等研修した。

ウ. 個別研修(11月14日～12月10日)

研修生の希望するテーマにより研修した。

各研修生が希望したテーマ

Mr. Sobero 漁撈機械

Mr. Mehdi 検 査(船体及び機関)

Mr. Seden 船 殻(組立)

Mr. Quddus 修 理(おもに船体の修理)

エ. パーティー

(ア) 歓迎パーティー (8月22日)

(イ) 送別パーティー (12月10日)

オ. 研修旅行及び工場見学

東北造船

山西造船

カ. 研修時間

午前 8:00 ~ 11:30 3.5 H

午後 12:30 ~ 16:00 3.5 H

計 7 H/日

休日は日曜及び祝祭日

キ. 宿 舎

三保造船クラブ(巖装員用宿舎)

ク. 昼 食

三保造船クラブにおいて、船主・監督用の食卓とした。

ケ. 作業服等

(ア) 支給品 安全靴・作業服・手袋・耳栓

(イ) 貸与品 安全帽・安全ベルト・防寒衣

2. 研修の成果

本研修を行なう為、当初スケジュールを作成するにあたり、研修生はすでに当社に来る前に理論は研修されており、また、本研修が現場実習であることから、当社においての研修は当社全体の工事の流れ及び日本人の考え方をよく理解してもらうことであると考え、スケジュールの作成を行なった。

このため、当社全体の工事の流れを知る為、現図から初まり各職場を工事のおこなわれる順序にしたがっての集団研修として約3ヶ月行ない、そのうち全体の流れがわかった所で各研修生の希望にそった個人研修を約1ヶ月行なうこととした。

(1) 集団研修

集団研修においては、当社全体の仕事の流れ及び日本人作業者の仕事ぶり、考え方を理解してもらうことが目的と考え、研修は机上で行なうのではなく、実際に作業者と共に作業を行なうことにより理解してもらう事とした。このため研修生は、各職場の作業長又は職長とともに行動してもらった。

研修生は各人によってかなりの技術的レベルの差及び専門の違いがある為に、集団研修中には各人の興味のある職場が異なり、興味のない職場ではあまり熱心に研修をしないという所が見うけられた。

しかし、研修生との最後の反省会においては、この研修を通して自国の造船所との違いが良くわかり、また多くの友人が出来、日本人の考え方がわかったと答えていることから、この集団研修は初期の目的を達したと考える。

(2) 個別研修

個別研修は集団研修により各職場の関係を理解出来てから選択した方が良くであろうと考え、どの職場を選択するかは個別研修を行なう1ヶ月前に1回希望をとり、さらに1週間前に再度確認をとった。

個別研修は、期間も1ヶ月と短かく多くの事を行なうのは不可能である為、各人選択は1ヶ所もしくは2ヶ所とした。

集団研修ですでに研修生は、各人が選択した職場については一応の知識がすでにある事、友人がいる事及び研修生にとって一番興味のある職場であるので、その研修はスムーズでかつ非常に熱意をもって行なわれ、しばしば定時間後にもわたる時もみうけられた。

(3) 研修旅行

研修旅行は当初研修生全員による見学は、東北造船と山西造船だけで他の見学は企画しなかった。これは、研修生が日本の造船所、その他多くのメーカーをすでに見学していた為、これ以上の見学をする必要はないという意見を持っており、かえって当社で1日でも多く研修をする方を望んだためである。

(4) その他

ア. 病気及びけが

研修期間が夏に始まり、冬もまだそれほど寒くない時に終了した為か病気にかかる者は1人もなく、また、けがについても、すりきず程度のもの以外は全くなく終了することができた。

イ. 余 暇

研修を通じ多くの友人が出来たため、友人の案内により富士山等、当社附近の名所をまわったりして生活を楽しんでくれたようである。

研修中に大きなトラブルもなくすごせたのは、当社における生活に満足してくれたということが一つの大きなウェイトをしめていると思う。

ウ. 宿舎・食事

宿舎は、船主・監督用の洋間を各人1部屋ずつ使用した。

食事は、豚肉を食べない人のためには、その他の食事を用意する等、配慮した。

このため宿舎、食事については特にクレームもなく満足してもらったと思う。

3. 研修における問題点と改善の方向

(1) 語学力及び技術的レベル

研修生の語学力は十分に意志を伝え、またこちらの意志を理解出来るものであり、かなり高いものであった。

したがって、研修はすべて日本語で行なったにもかかわらず、その理解は非常に早かった。

ただ、彼らは日本語の造船用語の知識がほとんどなく、研修当初は用語説明におわれることもしばしばあった。出来ればセンターにおいての日本語研修に造船用語を組入れてもらいたいという意見も出ていた。

研修生の技術的レベルについては各人の国における職場の違いもあり、自分の専門についてはある程度のレベルがあるが、他の分野についての知識はあまりなく集団研修で全員が確実に理解を示すまでには、少し時間を要したようである。

ただその熱意はむしろ自分の知らない分野の方が強く、早く理解しようと常に努力をしていた。

(2) 資 料

研修生は見せた資料については一応ほしがる傾向であった。今回研修がはじまるにあたり事前に各担当者と打合せを行ない、出来るかぎり社外秘のものは研修生には見せないように、またどうしてもさげられないものについては、資料として渡すことは出来ないと言うことで理解してもらった。

(3) 受け入れ体制について

研修が約4ヶ月と当社にとっては長期であるため、時として担当者がやむおえない理由により研修生の面倒を見る事が出来ない時もあったわけであるが、研修生には理解してもらおうようにつとめた。

本研修を終りにあたり、御助力、御指導いただいた国際協力事業団海外造船協力センター等関係各位の御配慮に厚く御礼申し上げます。

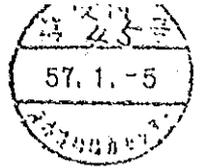
INDIVIDUAL TRAINING

NAME	DATE	11/10	11/23	11/30	12/7
Mr. Sobero				FISHING EQUIPMENT	
Mr. Mehdi				HULL & MACHINERY	INSPECTION
Mr. Seden				ASSEMBLY	
Mr. Quddus			SHIPS REPAIRING (HULL)		INSPECTION

TRAINING SCHEDULE

Month Item	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.
Operation	8/26 →				
Hull Construction Section	8/27 →		10/8 →		
◦ Mold loft					
◦ Welding & gas cutting					
◦ Fabrication					
◦ Assembly					
◦ Erection					
Machinery Outfitting Section			10/12 →		
◦ Machinery					
◦ Electric					
Hull Outfitting Section				11/2 →	
Individual Training				11/14 →	11/16 →

COPY



昭和56年12月16日

財団法人 海外造船協力センター

本部長 小松 義和 殿

石川島造船化工機株式会社
造船部

部長 山元 一夫



第14期(55年度)海外技術研修生

集団研修船舶技術実習コース

研 修 報 告 書

記

1. 研修の概要
2. 研修の成果
3. 研修における問題点とその改善方向

研 修 報 告 書

1 研修の概要

1) 期 間

昭和56年8月21日から昭和56年12月10日まで

2) 研修場所

東京都江東区新砂2-3-43

石川島造船化工機株式会社

3) 研修生氏名

MR Phua Hwan Khoon Eric (Singapore)

MR Rupasinghe Abayagunardena (Srilanka)

MR Semiti Vuniloaloa Cama (Fiji)

MR Wahjudi (Indonesia)

計 4名

4) 取りまとめ窓口

造船部船殻課 櫻井 長

5) 研修内容

下記の研修スケジュールにより実施し修了式を行って当社社長名の研修修了証を本人に手渡した。

a) オリエンテーション (8月21日～8月25日)

- (1) 社長、工場幹部への紹介
- (2) 組織及び諸規則の説明
- (3) 会社概要説明
- (4) 安全教育及び安全保護具類の貸与
- (5) 研修予定の説明
- (6) 寮、食事、ショッピング、病院、銀行等の案内

b) 個別研修 (8月26日～12月10日)

研修生の希望にもとづき予定を作成、途中調整しながら実施した。

e) パーティー

- (1) 謝恩パーティー 9月4日、11月20日
- (2) Hello Hello パーティー 12月2日 (三保)
- (3) 送別パーティー 12月7・8・9日

工場幹部、各課指導員とともに懇談会食した。

d) 研修旅行および工場見学

- (1) 東北造船所 10月1日
- (2) 山西造船所 *
- (3) 三保造船所 12月2日

e) 研修時間

午前 08:30～12:00

午後 13:00～16:30

(注) 毎朝安全体操終了後30分程度研修生全員とのミーティングを持ち、生活、研修面における問題や要望等を把握し、その解決に努めた。

6) 宿 舎

社宅1DK4室(1人1室を使用)第2砂町荘

7) 昼 食

船主ならびに監督官用来客食を手配。

8) 貸与、支給品

貸与品・安全帽、安全带、タオル、懐中電灯、手袋。

支給品・作業服(2着)、安全靴、防寒衣。

9) 控 室

船部会議室を研修生専用に確保し銅製机・更衣ロッカーを設置した。

(11月1日より監督官室へ移動)

2. 研修の成果

1) 総括

① 準備

海外からの研修生を造船部が主に指導計画を作成し実施することに決定し、さっそく準備に取りかかったが初めてのことでまったく認識情報不足の為、基本方針も固まらず当惑したがO.S.C.に於いて体験者の話し、研修生の希望を聞き総体的に理解し、指導体制もプロジェクト化し、社内的に意識の統一と理解を計り具体的な受入れ体制作りをした。窓口と研修実施部を一本化し、私的及び個別研修に関する全ての問題を処理する集中管理方式をとり本研修を円滑に進めることが出来た。

② 経過及結果

研修内容が生産管理、船殻（主に現図）、設計全般と各自の研修項目の違いがあり、3コースに分け計画を立案し推進した。

研修生全員が同職種の研究を同時期に集中的に受けられるような予定表が作成出来ず、指導員が飛び石トレーニングの為、調整がむずかしかった。

各人の能力、技術レベルはそれぞれが指向する分野については高く、他の分野については若干劣るという片寄りがみられたが、不足の分野を深く知ろうとする意志が研修内容に見られた。

研修生自身は紳士的で非常に意欲的に研修に取り組み指導員の熱意がこれに応え、各々の研修効果には多少の開きがあると思われるが、今回の造船所（中小手）に於ける我国の造船技術の水準についてよく理解出来又各々の国の造船技術との比較によって各々が将来を考えなければならぬ指針が明確になったと思う。

2) 個別研修

各々が希望する研修内容について各研修生から詳細のプランを提出させ、予定を組んだ指導員がそれを検討し、研修の時期期間を調整決定し、尚、研修開始前に再度面談により具体化する方法をとった。

当初は設計の研修はO.S.O.Oで済んでいるので造船所での研修は製造部のみを行き話であったが研修の目的の一つとして造船設計全般に亘り勉強したいとの強い要望があり、急いで設計部から指導員を選出したこともあって若干トレーナーの勉強や資料不足の面が見られた。

研修内容が実際の現場での作業の研修ではなく、計画の建て方、工程表の作成、工数管理、人員配置、見積、管理等間接部門の課長、技術スタッフの日常業務を主に研修する為、指導員が限定され、又研修コースも3コースとなり指導員の配分に苦慮した。しかし実際の研修面ではマン・ツー・マン方式となり、密度の濃い指導ができ結果的には研修効果は得られたと思ふ。

極力研修対象職種数を絞ることが研修効果面から望ましいことであるが、各々の希望研修範囲は広く、研修生個々の知識、理解力、興味、意欲等も個人差があり、全てに亘って理解を深めたかどうかは疑問である。しかし研修生全員が休まず、資料等を宿舍に持ち帰り勉強し、研修に対するその熱意は旺盛で指導員も自ずと熱が入って終始なごやかな雰囲気の中で研修が出来たことは大きな成果であった。

3) その他

① 言葉

日本語力についてみると漢字を混えても理解できるもの、日常会話しか解らない人と多少の個人差はあるが平均的には高い習得レベルにある。我々自身も上達の早さに驚いた(研修生の日頃の努力に頭が下がる)、当方の指導員も英語力に乏しいものもいたが、日本語と英語を折り混ぜながら説明したり、図解したり直接現物を見せ、かなり細部に亘り教育出来た。

② 宿舍、食事、病気

宿舍については一人一室でソファー、ベット、TV、冷蔵庫、洗濯機等又簡単な食事が作れる設備と食器類を用意し、満足を得られたと思う。食事については当初朝食、夕食は寮の食堂、昼食を社内食堂で監督官用の食事を喫食させるようにしたがどうしても揚物類が多くなり、彼等の体質に合わず皮膚の荒れ、吹き出物が出来た為、各自で昼食を除き自炊するようにしたが、我々は栄養のバランスが充分かどうか心配であったが問題とならずに済んだ。

健康状態は風邪で病院に各自一回づつの受診程度で済んだ。

③ 規 律

造船所に於ける休憩は昼食時間（一時間）以外はないが、研修室にコーヒ一等を常に置き自由に飲ませた為、特別の休憩時間を与えずに円滑に研修は運営された。

入社時刻は08:00と決めたが研修期間中は厳格に守られた。

たまに私的用事で外出する人もいたが必ず許可を求め了解を得て外出し規律は非常に良く守られた。

④ 私 生 活

研修生受入れに際し、余暇の過ごし方の支援について心配したが、O.S.O.O、I.S.Oでの研修、T.I.C等を通じた友人、あるいはNKK、三保の研修生との交流がさかんで休日はスケジュールが一杯で心配する必要がほとんどなかった。

環境の変化、時季、食事等の変化によって来社から一カ月位、一人の研修生がホームシックになり心配したが、心境の変化、慣れの為か少しずつ明るさが出て来て指導員にもなじみ安心した。

3 研修における問題点とその改善方向

① 技術力、知識レベル

かなり高い知識を持っているが技術不足の人、その逆の人、技術力・知識とバランスが非常に良い人、学歴の違い実務経験の多少そして出身企業の差等によって研修生自身のレベルは異なっていた。それぞれの研修については習熟も早く成果も大であったことは、意欲もさることながら各自の造船に関する認識と理解力が高かったためと思う。

当工場の建造船を対象とした研修は規模が同程度で研修生の興味の対象と、ちょうど一致していたと思われる。

② 研修課目

研修目的が明確でスケジュールは立てやすかったが実質の実務研修期間から考えると、テーマは一、二職種程度の研修課目に絞り広く深い研修が望ましいと思われる。しかし彼等の立場を考えると非常にむずかしいことと思うが、船舶建造技術について相当量の勉強をしているので自国での現職・将来の即効性等を考え合わせ研修内容を選沢できることが望ましいのではないかと思う。

研修に必要なあるいは要求する資料については全て応じられたと思う。

③ 研修受入体制

研修効果のよしあしは指導員の質に負うことが大であることは事実である。その指導員は日常業務遂行の中心的存在である為研修予定期間中はあらかじめ業務の負担の軽減を配慮せざるを得ない。研修の直前あるいは途中に突発的に入る緊急工事等で円滑な研修進行をさまたげることになり、研修生の一部には不満を感じた時もあると思われる。少数精鋭で業務運営をしていかなければならない中小造船所の実状を考えるとこれもある程度はやむを得ないと思う。

終りにあたり今回の研修が無事終了できたのも海外造船協力センター・国際協力事業団ならびに I.H.I の関係各位の助言とご指導の賜と厚くお礼申し上げます。

以上

運-19	コース名：バス・トラック整備技術	定員 10名
------	------------------	-----------

受入期間： 57. 1. 4 ~ 57. 3. 27

関係省庁： な し

受入機関： 日野自動車工業株式会社 八王子国際研修センター

国別応募状況：

国名	応募数	受入数	国名	応募数	受入数
カメルーン	2	1			
ガボン	4	2			
ギニア	2	1			
ザイール	4	1			
ルワンダ	1	1			
ブレンディー	1	0			
ソマリア	0	0			
セネガル	1	1			
マリ	1	1			
モーリタニア	0	0			
アッパーヴォルタ	1	1			
ニジェール	2	1			
モロッコ	2	1			

受入担当： 和田晴夫（八王子国際研修センター），梅崎 裕（本部）

コーディネーター： 松谷義信・川本洋子

本コースは便宜上運輸省関係に分類しているが、同省に全く関係のないJICAプログラムコースである。

昭和56年度 バス・トラック整備技術コースについて

研修期間 昭和57年1月14日～昭和57年3月27日
研修員 M. Meyong Amougou Pie (カメルーン) 他9名
研修機関 八王子国際研修センター研修課
担当 和田晴夫
日野自動車工業株式会社(TEL 0425-83-3111)
人事部教育第2課
課長 谷会恒司
森谷重夫
宿舎 八王子国際研修センター
使用言語 フランス語
研修監理員 財団法人 国際協力サービスセンター
松谷義信
川本洋子

56年度 バス・トラック整備技術コース日程表

日 程	57年1月14日(木)～1月15日(金)	研修員来日 八王子センター入館
	57年1月18日(月)～1月22日(金)	一般研修 オリエンテーション
	57年1月25日(月)～3月12日(金)	技術研修(自工)
	57年1月15日(月)～3月20日(土)	研修旅行
	57年1月25日(水)～3月27日(金)	研修員帰国

研 修 内 容

月 日	曜	午 前	午 後
1. 25	月	開 講 式：作業着支給, PR映画	日野工場見学, 歓迎パーティー
26	火	講 義：エンジンの基礎理論	実習：エンジン分解
27	水	同 上	同 上
28	木	講 義：ピストン, 燃焼室の構造, 機能	実習：部品検査
29	金	工場見学：日本ピストンリング(ライナ, リング製造)	泉自動車(ピストン製造)
30	土	休	日
31	日	休	日
2. 1	月	講 義：バルブ・タイミング	実習：バルブシート, バルブガイド 分解・組立
2	火	講 義：ピストン, ライナー, 冷却システム, ベアリング	実習：エンジン組立
3	水	講 義：クランクシャフト, 潤滑装置	同 上
4	木	実 習：エンジン組立, 始動	左 同
5	金	工場見学：羽村工場(小型車製造)	レクリエーション
6	土	休	日
7	日	休	日
8	月	講義及び実習：エンジン性能試験	
9	火	講 義：トルク, 馬力, 燃料消費量の計算	
10	水	講 義：インジェクションポンプの構造, 機能	実習：インジェクションポンプ分解, 組立(列型)
11	木	実 習：プレストロークの調整	実習：噴射量の調整
12	金	工場見学：ディーゼル機器(インジェクションポンプ製造)	
13	土	休	日
14	日	休	日
15	月	講 義：分配型ポンプ構造, 機能	実習：分配型ポンプの分解, 組立
16	火	講 義：分配型ポンプ作動	実習：分配型ポンプ調整
17	水	講 義：クラッチ, クラッチプースター構造, 機能	実習：プースター, クラッチ分解, 組立

月日	曜	午	前	午	後
2. 18	木	旅	行：鎌倉，熱海		
19	金	旅	行：箱根，山中湖		
20	土		休	日	
21	日		休	日	
22	月	講	義：トランスミッション構造，機能	実習：トランスミッション分解，組立	
23	火	講	義：フロントアクスル，アライメント構造，機能	実習：フロントアクスル，アライメント分解，組立，測定	
24	水	講	義：ステアリング構造，機能	実習：ステアリング分解，組立	
25	木	講	義：リアアクスル構造，機能	実習：リアアクスル分解，組立	
26	金	工場見学：	日野車体		
27	土	講	義：ディファレンシャル構造，機能	実習：ディファレンシャル分解，組立	
28	日		休	日	
3. 1	月		休	日	
2	火	講	義：エアサスペンション構造，機能	実習：レベリングバルブ分解，組立，調整	
3	水	講	義：サービスペーキ，パーキングブレーキ構造，機能	実習：ブレーキの分解，組立	
4	木		同上	同上	
5	金	工場見学：	ブリヂストンタイヤ（タイヤ製造）		
6	土		休	日	
7	日		休	日	
8	月	工場見学：	日本電池（バッテリー）		
9	火	講	義：電気の基礎スターター構造，機能	実習：スターターの分解，組立	
10	水	講	義：オルタネーターの構造，機能	実習：オルタネーター分解，組立	
11	木	工場見学：	沢藤電機（電装品）		
12	金		修了式		
13	土		休	日	
14	日		休	日	
15	月		一般研修旅行		
16	火		〃		
17	水		〃		
18	木		〃		
19	金		〃		
20	土		〃		
21	日		休	日	
22	月		予備日		
23	火		〃		
24	水	修了式	国際協力事業団 八王子研修センター		
25	木				

運-20	コース名：鉄 道 信 号	定員 8 名
------	--------------	-----------

受入期間： 57. 1. 14 ~ 57. 5. 3

関係省庁： 運輸省鉄道監督局

受入機関： 信号工業協会

国別応募状況：

7名

国 名	応募数	受入数	国 名	応募数	受入数
スリランカ	1	1			
タイ	1	1			
パキスタン	0	0			
バングラデシュ	0	0			
フィリピン	0	0			
マレーシア	1	1			
アルゼンティン	1	1			
ブラジル	4	1			
メキシコ	4	1			
イラク	2	1			
エジプト	1	0			
ザイール	0	0			

受入担当： 村上 博

コーディネーター： 等々力 俊光

昭和56年度(継)鉄道信号コースエバリュエーション会議

日 時 : 56年6月5日(金) 10:30 ~ 12:00

場 所 : TIC セミナールームF

出席者 : 堤 義 徳 運輸省鉄道監督局車両工業課
中 島 保 三 日本国有鉄道電気局信通課
牧 島 亜紀雄 日本国有鉄道外務部海外技術協力室
赤 平 仁 株式会社 京三製作所外務部
結 城 文 雄 大同信号株式会社営業本部
福 田 二 郎 信 号 工 業 協 会
鈴 木 幸 雄 日本国有鉄道外務部
大久保 宏 明 研修事業部研修第一課
村 上 博 研修事業部研修第一課

議 題 : 56年度(継)鉄道信号コースについて

本エバリュエーション会議における研修員の要望及び意見は次の通り。

- (1) 研修項目をしぼってもっと内容を深くして欲しい。
- (2) 信号設置のコスト面を説明して欲しかった。
- (3) 信号の分野における情報を我々の帰国後も継続して知らせていただきたい。またその為の方法はどうすればよいか？
- (4) 研修期間はフリーな時間が多過ぎたので、もっと日程をつめれば3ヶ月で十分同一内容をカバーできる。
- (5) 見学の前に必らずそれに関する講義を終えているようにしていただきたい。予備知識無しでは見学してもよくわからない。
- (6) 旅行はまとめてできないか？
- (7) 信号と通信について学んだが信号のみにできないか？

以上の意見に対し、

(1)、(2)に関し、本コースには信号のみならず通信等の分野からの参加者もあり、また国にもより、各々興味が多少異なっており、全ての参加者を完全に満足させることは不可能であるが、それをカバーするため、個別の質疑応答が時間の許す限り可能であるのでその都度対応することとした。(福田)

(3)については、特に資料等は直接、信号工業協会あるいは国鉄にコンタクトをとった方が良い。(大久保)

(4)については、次年度(56年度)は1月14日~5月4日であり、短縮されている。(村上)

以上であるが本会議を基に8月中に次年度の第一回事前研修打合わせを実施する予定であり、その際研修員からの要望・意見のみならず、受入れ側各機関の反省及び要望をまとめて、次年度の研修に反映してゆきたい。

昭和56年度鉄道信号コース研修行程表

月日	曜日	研修項目および時間	備考	月日	曜日	研修項目および時間	備考
1月14日	木	米日		2月4日	木	信号講義(管理編)	T I C・電気局
15日	金	由(成人の日)		5日	金	施工管理、設備の保全(9:30~16:00)	"
16日	土	・ブリーフィング	T I C・J I C A	6日	土	信号講義(管理編)	"
17日	日	由		7日	日	運転、検員養成、技術開発(9:00~16:00)	
18日	月	・J I C Aの事業概要の説明	T I C・J I C A	8日	月	自	
19日	火	・日本の風土と人間、日本語について	"	9日	火	自	
20日	水	・日本の建築、行政機構について	"	10日	水	信号講義(管理編)	T I C・電気局
21日	木	・日本の文化、教育について	"	11日	木	設備計画、設備設計(9:30~16:00)	
22日	金	・東京都内見学	"	12日	金	千葉訓練室	千葉局
23日	土	由		13日	土	東京府中工場(A T S、直電、車両)	東京芝浦電気局
24日	日	由		14日	日	(14:00~16:00)	
25日	月	研修行総説明(10:00~12:00)	J A S I	15日	月	自	J A S I
		運輸省多さい(13:30~15:00)	運輸省・車工課			信号講義(新幹線のできるまで、信号におけるコンピュータの活用と実施例(10:00~16:00))	
		運輸概論	国鉄・外務部			自	
26日	火	国鉄多さい(15:30~16:30)	国鉄・外務部	13日	土	由	
27日	水	Country Report	T I C・J A S I	14日	日	由	
28日	木	国鉄概論(9:30~12:00)	T I C・外務部	15日	月	東京駅(一般概況、A T C機室、防災設備)	東京南局
		電気概論(13:30~16:00)	"			(16:00~12:00)	
29日	金	スライド上映(信号のはなし)(9:30~12:00)	J A S I			新幹線総合指令所(C T C、アラートラック)	幹線局
		信号概論(13:30~16:00)	J A S I・電気局			(13:30~16:00)	
30日	土	自		16日	火	大井工場(A T S車上、車両)(10:00~12:00)	大井工局
31日	日	自		17日	水	塩浜操車場(信号、直電)(14:00~16:00)	東京南局
2月1日	月	中央鉄道学園(一般概況、信号および通信関係実習設備)(10:00~16:00)	学	18日	木	横浜工場(信号)通信機器(10:00~13:00)	日本電気
2日	火	鉄道技術研究所(9:30~12:00)	技			信号講義(管理編)	T I C・学
3日	水	中央情報システム管理セミナー(13:30~15:30)	中情	19日	金	鉄道通信(9:30~16:00)	"
		通信概論(9:30~16:00)	T I C・電気局			信号講義(技術編)	"
				20日	土	信号制御技術概論(9:30~16:00)	"

月日	曜	研修項目および時間	備考	月日	曜	研修項目および時間	備考
2月21日	日	自 由		12日	金	新幹線、電気検測車(10:00~12:00)	幹 局
22日	月	武蔵野線車場(信号、通信)(14:00~16:00)	東京北局	13日	土	自 由	
23日	火	信号研修(技術編)	TIC・学園	14日	日	自 由	
24日	水	運動園芸(校庭・緑地)(9:30~16:00)	"	15日	月	研修行程打合せ(10:00~12:00)	J A S I
25日	木	信号研修(技術編)	"	16日	火	メーカー研修(大同信号)軌道回路(9:30~16:00)	池 上 工 場
26日	金	信号研修(技術編)	"	17日	水	" (") 閉そく装置(9:30~16:00)	"
		CTC(PBC)(9:30~16:00)	"	18日	木	" (") 路切保安装置	"
		信号研修(技術編)	"	19日	金	" (") 集中監視装置	"
		ATS・ATC(9:30~16:00)	"				
27日	土	自 由		20日	土	自 由	
28日	日	自 由		21日	日	自 由	
3月1日	月	信号研修(技術編)	"	22日	月	自 由(春分の日)	
2日	火	新幹線ATC等(9:30~16:00)	"	23日	火	メーカー研修(大同信号)ATS(9:30~16:00)	池 上 工 場
		信号研修(技術編)	"	24日	水	" (") ATC(9:30~16:00)	"
3日	水	新幹線:情報連絡、通信設備(9:30~12:00)		25日	木	" (京三製作所)総電連動(9:30~16:00)	緑 見 工 場
		新幹線:コマトラック、電気試験車(13:30~16:00)		26日	金	" (") " (9:30~16:00)	"
		上野(9:33) → 勝田(11:56)	日立製作所	27日	土	自 由	
4日	木	水戸工場(ATC車上、車両)(14:00~16:00)	水戸油	28日	日	自 由	
		水戸(8:55) → 盛城浅川(11:33)	大 那 須 池	29日	月	メーカー研修(京三製作所)総電連動(9:30~16:00)	"
		大同信号、浅川工場(13:00~15:00)		30日	火	京三製作所(通信、車両)(10:00~15:00)	京 王 帝 都 ・ 調 府
5日	金	黒磯→宇都宮	幹 局	31日	水	メーカー研修(京三製作所)総電連動(9:30~16:00)	緑 見 工 場
		新幹線機器室(宇都宮)、宇都宮貨物ターミナル	東京北局	4月1日	木	" (") 電気転てつ機	"
		宇都宮→上野					
6日	土	自 由		2日	金	" (") PTC(9:30~16:00)	"
7日	日	自 由		3日	土	自 由	
8日	月	東京モノレール(信号、通信、車両)(10:00~13:00)	東京モノレール	4日	日	自 由	
9日	火	住電、大船工場(ケーブル、電線)(14:00~16:00)	住 友 電 工	5日	月	メーカー研修(日本信号)CTC(9:30~16:00)	与 野 工 場
10日	水	信号研修(信号機、信号機)(10:00~15:00)	J A S I	6日	火	" (") " (9:30~16:00)	"
11日	木	営団地下鉄(信号、通信、車両)(10:00~15:00)	営 団				

月日	曜	研修項目および時間	備考	月日	曜	研修項目および時間	備考
4月7日	水	メーカー研修(日本信号)CTC(9:30~16:00)	与野工場	4月24日	土	別府駅(盛電運動)(10:00~12:00)	大分交信局
8日	木	" (") 電子機器(11:00~15:00)	与野工場	25日	日	別府発(14:49)火の山6号阿毛港(17:08)	阿毛港
9日	金	" (") RC(9:30~16:00)	与野工場	26日	月	阿毛港(13:54)火の山4号熊本港(14:58)	熊本港
10日	土	自由	名鉄局	27日	火	熊本発(15:25)有明22号博多港(17:15)	博多港
11日	日	自由	名古屋油	28日	水	博多新幹線車両基地(10:00~12:00)	小倉港
12日	月	東京発(10:16)乙元ま229号名古屋港(13:06)	名古屋油	29日	木	博多発(14:54)日南1号小倉港(15:54)	小倉港
13日	火	名古屋港(新幹線設備、自動車バスターミナル設備) (10:00~13:00)	名古屋油	30日	金	関門トンネル(トンネル内保安設備) (10:00~12:00)	門
14日	水	名古屋港(100Hz(MG)、分時周軌道回線) (14:00~16:00)	名古屋油	5月1日	土	小倉発(15:04)ひかり10号東京港(21:20)	TIC-JICA
15日	木	名古屋港(10:32)乙元ま211号新大阪港(11:54)	大坂油	2日	日	報告書作成	"
16日	金	大鉄局あいさつ	大坂油	3日	月	自、由(天皇誕生日)	"
17日	土	自由	大坂油			エパリエーション(10:30~12:00)	TIC-JICA
18日	日	自由	大坂油			閉路式、パーチャ(12:00~14:00)	TIC-JICA
19日	月	吹田操車場(信号、通信設備)(10:00~12:00)	大坂油			新製、準備	JICA
20日	火	新交通システム(14:00~16:00)	大坂油			発、準備	"
21日	水	比えい中継所(SHF設備)(11:00~12:00)	大坂油			発、準備	"
22日	木	(マイクロボス)	大坂油			発、準備	"
23日	金	阪急電鉄(信号、通信、電力、車両設備) (10:00~16:00)	大坂油			発、準備	"
		新大阪発(10:12)ひかり1号広島港(12:06)	広島油			発、準備	"
		広島鉄道学園(10:00~12:00)	広島油			発、準備	"
		広島発(15:08)ひかり5号小倉港(16:15)	別府油			発、準備	"
		小倉港(16:35)ひかり3号別府港(16:32)				発、準備	"

 注 JICA:Japan International Cooperation Agency
 (国策協力事業団 研修事業部研修第一課 担当:村上 新宿区店新宿2丁目1番地 新三井ビル 電話 346-5160)
 TIC:Tokyo International Centre,JICA.
 (東京インターナショナルセンター 新宿区市ヶ谷本村町4番11 電話 267-2311)
 JASI:Japan Association of Signal Industries
 (信号工業協会 担当:福田 田 中央区八重州1-5-5 浅川ビル5F 電話 271-1887)

選一特1	コース名：(特設)台風予警報(気象)	定員 11名
------	--------------------	-----------

受入期間：56.7.23～56.8.21

関係省庁：気象庁

受入機関：同上

国別応募状況：

国名	応募数	受入数	国名	応募数	受入数
(気象)			(水文・防災)		
中国	1	1	中国	1	1
タイ	1	1	タイ	1	1
大韓民国	1	1	大韓民国	1	1
フィリピン	1	1	フィリピン	1	1
マレーシア	1	1	マレーシア	1	1
香港	1	1			

受入担当：大久保宏明

コーディネーター：山口啓子(気象) 福田陽子(水文・防災)

台 風 予 警 報 (気 象)

1 気象部門

1. Evaluation Meeting

1-1 コース期間については妥当(全員一致)

1-2 内容については、水文・防災部門に比べて、気象部門の方ばかりが、作業に追われ通しで忙しく、気象庁の小さな部屋に閉じ込めりきりの生活であった。

(富士山レーダー見学、気象予報に携っている人々と気象庁外での情報交換の場を持つ、等の機会を与えて欲しかった。)

1-3 ホテルの各部屋にテーブル、机の類が無かった為、資料・レポート作成際大変苦勞した。

1-4 自分達は研修の為に来た訳ではないので、研修員として取り扱われることに不満を覚えた。

・東京の物価を考えると、allowanceは必ずしも十分とはいえない。

・その他、滞在中、特に困った事、深刻な問題点はなし。

2. 問題及び反省点等

2-1 台風委員会の合同台風業務実験をJICAの研修コースとして実施したために、研修員側には自分達の立場に関する不満が生じ、各研修員の各国の台風委員会を代表して参加していると意識とのずれが生じていた。

2-2 WMOを通じて中国、ベトナム各1名が、JICA研修員6名に加わったため、研修監理員及び担当者の責任等の問題にかなりの無理が生じた。(実際は病気等の問題が生じなかったため、深刻な問題にはいたらなかった。)

2-3 JICA外の受け入れである、ベトナムの参加者は、2週間遅れたこと。その上、中国・香港等の研修員は、ベトナムからの参加者とは、個人的に親しい関係になりたくないように見受けられた。ベトナムの参加者が一人浮き上がってみえた。

2-4 プログラムはマネジメントボードで決められていることが、通常のJICAコースとの違いであった。仕事の性質上、交代で夜通し観測をするなどハードのスケジュールであることは、やむを得ないとしても健康上の問題が今後は生じるであろう。

2-5 さらに、スケジュールの問題で、エバリュエーション・ミーティングでも出ていたように、毎日の作業に追われており、日本での生活を楽しむことや、研修旅行がなかったことは日本の現状を知ってもらうことができなく残念であった。

2-6 研修監理員は、研修の運営上の問題、研修生の生活面の世話等が本来の仕事で、タイプ打ちが本来の仕事ではないので、実験の性質上、タイピストが必要ならば準備する必要がある。

2-7 本研修の性質上、研修生もホテルに帰ってから種々の資料整理、レポート作成等をしなければならぬのにホテルの各部屋に机がなかったことは今後の反省材料の一つである。

3 結 論

3-1 担当としては、本研修はあくまでも、台風委員会のもとの実験であるため、JICAの1コースと

して扱かわずに、実験の参加者にふさわしい待遇、又、参加者と意識にもとづいた台風業務実験にすべきであると考えられる。

- 3-2 本研修の成果については、担当者としては各研修員はそれぞれ成果を得て帰ったようである。
- 3-3 又、気象庁としてほんねは、本実験については、JICAより金と研修監理員(タイピスト)さえいればよいということであると見受けられた。
- 3-4 3年間計画の第1年度(予備実験)であるので、来年度(本実験)よりの反省点として以上であるが、3年間で計画通り終了すべきである。

④ 台風予警報（気象）

月日	曜	
7. 23	木	米 日
24	金	Briefing (JICA)
25	土	Free
26	日	Free
27	月	表敬訪問(外務省・建設省・科学技術庁・国土庁・気象庁)
28	火	気象・水文・防災3部門合同セミナー(TIC)
29	水	IEC(国際実験センター)運営に関する討議及び気象庁内の各施設見学
30	木	TOPEXの各操作マニュアルの試験
31	金	気象衛星センター及び気象衛星通信所見学
8. 1	土	TOPEXの各操作マニュアルの試験
2	日	Free
3	月	TOPEXの各操作マニュアルの試験
4	火	"
5	水	"
6	木	"
7	金	台風追跡作業
8	土	"
9	日	Free
10	月	諸作業の整理・検討・評価 (台風追跡作業結果まとめ)
11	火	(")
12	水	(")
13	木	(レポート作成)
14	金	(")
15	土	Free ※(任意, レポート作成)
16	日	Free
17	月	諸作業の整理・検討・評価(レポート作成)
18	火	最終レポート作成, 反省会
19	水	気象・水文・防災3部門合同セミナー(TIC), 評価, 閉講式(TIC)
20	木	帰国準備
21	金	離 日

運-特2	コース名：(特設) 観光人材開発セミナー	定員 4名
------	----------------------	----------

受入期間： 56.10.29～56.12.10

関係省庁： 運輸省大臣官房観光部

受入機関： 財団法人 日本ホテル教育センター

国別応募状況：

国名	応募数	受入数	国名	応募数	受入数
インドネシア	1	1			
シンガポール	0	0			
タイ	2	2			
フィリピン	1	1			
マレーシア	1	0			

受入担当： 北林 春美

コーディネーター： 坂本 邦子

観光人材開発セミナー評価会

昭和56年12月8日

於 JICA 第2会議室

出席者 研修員 4名

運輸省観光部 石坂・進藤・中村

ホテル教育センター 石塚

JICA 笠井・北林・坂本

1. セミナー参加の目的

- ・タイ： ホテル・ビジネスや他の分野の観光産業について学び、討論すること。
- ・インドネシア： 日本の観光産業、人材教育について最新の情報を得、比較研究をするとともに、自分の業務であるカリキュラム作成に役立てること。

2. 期間

- ・タイ、インドネシア： この内容ならちうど良い。
- ・フィリピン： 講義時間が多すぎた。1ヶ月でよい。

3. 人数

- ・少なすぎた(全員)、10~15が適当

4. 内容

フィリピン ・講義が多すぎた。例えばホテルスクール? については一人の講師で十分だと思う。

- ・見学の割合を増やした方がいい。
- ・テキスト等、日本語のものが多かった。
- ・ガイドについてもっと知りたかった。

タイ ・内容で削るところはないが、Transportation 等加えて欲しい。

- ・良いと思った講師は、英語のpresentationの良かった人である。

タイ ・カントリーレポートの内容は、本論にはいる前の各国のbackground についての部分が多すぎたと思う。

インドネシア ・レストラン・旅館の講師を加えて欲しい。

- ・見学の前に、インフォメーションを欲しい。
- ・講義の組立がシステムティックでないことが多かった。
- ・各講師にくり返しが多かった。

5. その他

- ・JECの図書室が使えたのは有難かった。
- ・講師で素晴らしいと思ったのは、ニューオータニ、JNTO、大橋氏
- ・General Orientation をプログラムの中に入れて欲しい。
- ・Conference の参加は色々の情報あつめに役立った。
- ・受入れ通知をもらうのが遅すぎてレポートの準備がよくできなかった。(フィリピン)

人材開発セミナーレポートまとめ

- (I) 1. 人事面に直接関与していないために評価するのは難しい。自国の人事監理についても多くは知らない。
2. コースのアウトラインとか、他の教材で英文のものが研修員に手渡されるべき。
3. 実習とか実地見聞多い方が勉強になる。(カリカ氏 (フィリピン))
4. 研修に問題があると感じた点として(グレードに(C)をつけたもの)
- a) 教材が整っていない。
- b) 授業に一貫性を欠き、関連のないテーマに時間がとられすぎ本論がおろそかになった。
- c) 討論が十分に行なわれなかった。(アーディカ氏 (インドネシア))
5. JEC 鮫島さんの授業はおもしろかった。
- ニューオオタニ 青木さんのも有益、サンルート 丸山氏の授業で職訓の新しい観念「①企業内訓練は技術サイドの問題のみから捕えるのは妥当でなく、従業員は人として育てるべきでありその結果、始めてにこやかな接客が可能となる、②人材とは訓練によってだけ生れるものなのではなくて、オーナーの従業員に対する意識にまつところが大きい。」という意見は興味深く聞いた。(スピチエン氏 (タイ))
6. 英語力・表現力のそなわった人の講義は理解できた為、おもしろいと感じた。(カモルワン氏 (タイ))

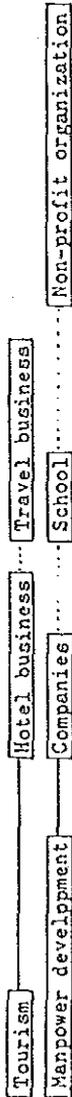
(II) 提 案

1. 研修員受入れを観光省のみに限らずに、アジア観光協会、及びホテル、レストラン協会を含んだ中から選別すべき。
2. カントリーレポートの準備が余裕をもってできればデータもそろえられたと思うが、少なくとも1ヶ月前に受入れノータイスが欲しい。(カリカ嬢)
3. レストラン、ケイタリング業、旅行業の講義が必要。
4. 教材が日本語の場合はレジメを準備し、かつ十分な議論で補完すべき。
5. 参加人数(国)を増やし、各国の情報交換の場となるように計るべき。(15名 最高)
6. ある講義では本論にポイントを絞る必要があったと感じた、是正要。
7. 同じデータが何度も出てきた(旅行業界)のが気になった。(アーディカ氏)
8. 知識・技術・実習・全般に亘って適切であった。(スピチエン氏)
9. ホテル業界に集中させるのではなく、旅行業の他の分野をも取り上げてはどうか。(カモルワン嬢)

THE STRUCTURE OF THE SEMIAR IN TOURISM MANPOWER DEVELOPMENT 1981

FIELDS OF THE SEMINAR

JICA MOT JEC



CONTENTS OF THE SEMINAR

1	Generals	General education system	JEC (Japan Education Center for Hotel Industry)
		General personnel management system	JEC ()
		Tourism administration	MOT (Ministry of Transport)
		Tourism industry	JNTO (Japan National Tourist Organization)
		Hotel business	JHA (Japan Hotel Association)
		Travel business	JATA (Japan Association of Travel Agents)
2	Case studies	Hotels	City hotel (Biggest) — The New Otani Middle size hotel — Nippon View Hotel Resort hotel (Deluxe) — Fujiya hotel Chain hotel (Franchise) — Sun Rout Hotel System
		Travel agencies	International — Japan Travel Bureau Domestic — Nippon Travel Agency
		Schools	University (tourism) — Rikkyo University Junior college (tourism) — Toyo Junior college Vocational school (Travel) — Travel Journal Institute of Japan Vocational school (hotel) — Japan Hotel School
		Non-profit org.	Hotel — Japan Education Center for Hotel Industry Travel agency — Japan Association of Travel Agents
3	Experience	Observation	Hikkyo, Toyo, Travel Journal, Japan Hotel School, JEC, The New Otani, Josai, Seikei.
		Tour	Kagoshima, Osaka, Kyoto.
		Convention	The 3rd Japan Congress of International Travel
			4 Presentation

QUESTIONNAIRE
FOR
EVALUATION MEETING
ON
THE SEMINAR IN TOURISM MANPOWER DEVELOPMENT

Dec. 8, 1981

1. Before Coming to Japan

- 1) What was your main objective for participation in this seminar?
- 2) Did you read the General Information (G.I.) before applying?
- 3) Did you get enough information from the G.I.?

2. Curriculum

- 1) Is the seminar length too long/just right/too short?
- 2) Is the size of the group too big/just right/too small?
- 3) Would you comment on a) time allocation b) relevance & usefulness of * lectures, * observation & study trips, and * country report presentation?
- 4) Are there any subjects or observations proposed to be added to or eliminated from the program?
- 5) Do you think the order or sequence of each program just right/requested to be rearranged?
- 6) Were teaching equipments & literatures satisfactory/unsatisfactory?
- 7) Were the presentation & clarity of lectures good/not good?
- 8) Was your objective for participation fulfilled? If not, what would you request to modify?
- 9) Are the knowledge & technique obtained in the seminar:
Applicable/partly applicable/not applicable to your job?

- 10) In case the answer is applicable or partly applicable, what & how would you like to apply?
- 11) In case the answer is not applicable, what is the main reason for that?

3. Administration & Management

- 1) Were the briefing & General orientation at TIC satisfactory/unsatisfactory?
- 2) Was the leadership & Coordination for seminar conduct satisfactory/unsatisfactory?
- 3) Was the communication among participants good/poor?
- 4) Were the accommodation & living condition good/poor?

昭和56年度 観光人材開発セミナー反省会要旨

日 時 56年12月18日 15:00～17:00
場 所 国際観光振興会 会議室
出席者 MOT観光部(石坂・進藤・中村)
ホテル教育センター(石塚)
JICA (北林・坂本(監理員))

1. カリキュラムについて

○問題点:

- ・講義内容の重複が多かった。
- ・各講師に対する時間配分が適当と思われないことがあった。
- ・講師は、各機関の経営者・広報担当者が多かったが、研修教育担当者の方が望ましい。
- ・運輸の方で各講師に依頼した概要ポイント通りに講義が実行されない場合があった。
- ・各種ホテルの人材教育については、皆がその独自性でなく、共通のことを話した為、同じような講義になった。
- ・研修員のレベル・分野としては、各国の研修機関の教務主任クラス(講師より一段上で、カリキュラム作成者)を想定していた。

今回の場合、分野として異っていたのはフィリピンのみで、他の3人は研修に携っていた。但し、その携り方が異っていた為、興味の在り方も異なるものとなっていた点はある。

○改善を考えている点(運輸省・教育センター)

- ・現在の構成を基本的には変更しないで、時間配分を変更し、講師の配置・内容等について、プログラム作成者の方から、意向に沿ったものとなるよう強く働きかけていく。
- ・プログラム・オリエンテーションを強化することで、各講義の全体としてのつながり、位置づけを研修員に知らしめ、理解させる。

昭和56年度観光人材開発セミナー日程

月	日	曜	実施内容	担当機関	場所
10	29	木	来日		
	30	金	国際協力事業団(JICA)ブリーフィング	JICA	JICA研修センター(TIC)
	31	土			
11	1	日		運輸省(MOT) 日本ホテル教育センター	MOT
	2	月	AM プログラム オリエンテーション PM 運輸省観光部長表敬訪問 日本ホテル教育センター会長表敬訪問 歓迎会	(JEO) MOT JEC JICA, MOT, JEO	" " JEC "
	3	火	(文化の日)		
	4	水	AM 講義「我が国の教育制度」 PM 講義「企業における人材開発」	JEC "	JEC "
	5	木	AM 講義「観光行政、観光政策及びその法体系」 PM 講義「観光産業」	MOT 国際観光振興会	" "
	6	金	AM 講義「ホテル業の現況と人材開発」(総論) PM 講義「旅行業の現況と人材開発」(総論)	日本ホテル協会 日本旅行業協会(JATA)	" "
	7	土			
	8	日			
	9	月	AM 参加各国の観光人材開発に関するプレゼンテーション PM ション	MOT, JEO	"
10		火	"	"	"
11		水	"	"	"
	12	木	AM 講義「ホテル業における人材開発—専門学校」 PM 講義「 " — 企業内教育」	JEC 富士屋ホテル	" "
	13	金	AM 講義「観光分野の大学教育」 PM 講義「ホテル業における人材開発—企業内教育」	立教大学 JEO	" "
	14	土			
	15	日			
	16	月	AM 講義「 " — "」 PM 講義「 " — "」	ホテル・ニューオータニ ホテル・サンルート	" "
	17	火	AM 講義「 " — "」 PM 講義「観光分野の大学教育」	日本ビュウホテル 東洋大学短期大学	" "
	18	水	AM 講義「旅行業における人材開発—専門学校」 PM 講義「 " — 通信教育」	トラベルジャーナル 旅行専門学校 "	" "
	19	木	AM 講義「 " — 企業内教育」 PM 講義「 " — "」	日本交通公社(JTB) "	" "

